終末の時代を目前にした、自分の過ちによらない苦難

第一ペテロ 4 章 1-19 節
ペテロ・シリーズ#36
ロバート・D・ルギンビル博士 著
https://ichthys.com/Pet36.htm
からの翻訳

第一段落（1-6 節）

⑴ それゆえ、キリストが肉体において死なれたのだから、私たちも同じ心構えで武装すべきである。[イエスがそうであったように]肉体において苦しみを受けた者は、罪との関わりを断ったのだと[考えるべきである]。⑵ それは、[私たちも主と同じように]地上での残された生涯を、もはや人間の欲望に従ってではなく、神の御心に従って生きるためである。⑶ なぜなら、あなたがたはこれまでの人生において、異邦人（すなわち、不信者）が望むことを行うために、すでに十分な時間を費やしてきたからである。彼らは[その生活の中で]、放蕩、情欲、暴飲暴食、乱痴気騒ぎ、酒宴、そして[その他の]不法な偶像礼拝にふけっている。⑷ [不信者たちは間違いなく]あなたがたが自分たちと同じように、そのような度を越した放縦な騒ぎに加わろうとしないことを不思議に思い、そのためにあなたがたを中傷し、評判を傷つけている。⑸ しかし、彼らは、生きている者（すなわち、あなたがた信者）と死んだ者（すなわち、あなたがたに敵対する不信者）を裁く備えをしておられる方に、[これらすべてについて]申し開きをしなければならない。⑹ まさにこの理由から、[あなたがたに対してと同じように][霊的に]死んでいる者たちにも福音が宣べ伝えられたのである。それは、彼ら[もまた]、[自分たちの]人間としての行いに従って肉体において罪を指摘された後、神[の恵み]に従い、御霊によって生きるようになるためである。（第一ペテロ 4 章 1-6 節）

キリストの模範（1 節）：

それゆえ、キリストが肉体において死なれたのだから、私たちも同じ心構えで武装すべきである。[イエスがそうであったように]肉体において苦しみを受けた

者は、罪との関わりを断ったのだと[考えるべきである]。(第一ペテロ 4 章 1 節)

ここでもまた(第一ペテロ 2 章 21-23 節参照)、ペテロは私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストの模範を直接示し、イエスご自身が私たちに命じられたように、その足跡に従うよう促しています。

そこでイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」(マタイ 16 章 24 節 /NKJV 訳)

それからイエスは、弟子たちと共に群衆を呼び寄せて言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」(マルコ 8 章 34 節 /NKJV 訳)

それからイエスは、すべての人に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」(ルカ 9 章 23 節 /NKJV 訳)

私たちはイエス・キリストのものです。主はご自身の血、すなわち、私たちのすべての罪の代価を支払うために十字架上で受けられた霊的な死によって、私たちを買い取ってくださいました。私たちは主にすべてを負っています。死と裁きからの救いも、その結果として与えられる永遠の命も、すべて主のおかげなのです。ですから、私たちは主が望んでおられることを、いつでも喜んで行う用意ができているべきです。主こそ私たちの命なのですから、私たちは常に主のために自分の人生を生きようとするべきなのです。

私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。(ピリピ 1 章 21 節)

しかし、ここで注意しなければならないのは、これはあくまでもたとえであるということです。全人類の罪を贖うために、キリストが十字架上の暗闇の中で受けられた苦しみは、そのごくわずかな部分でさえ、私たちの想像をはるかに超えるものであり、ましてや私たちが耐えられるようなものではありませんでした。主イエスが私たちの身代わりとなって裁きを受け、世の罪の代価を支払われたときの苦しみは、あまりにも激しいものであったため、聖書ではそれを「死」と呼び(イザヤ 53 章 9 節では、その激しさを表すために「死」が複数形で用いられているほどです)、その霊的な死、すなわち「キリストの

血」こそ、ペテロがこの章の 1 節で言及しているものなのです。[1] キリストが私たちを救うために肉体的な苦しみを受けなければならず、また、十字架上での計り知れない霊的な死に耐えるために、「顔を火打石のように堅く」しなければならなかったように(イザヤ 50 章 7 節; マタイ 26 章 38-42 節; マルコ 14 章 34-36 節; ルカ 22 章 42 節参照)、主に属する私たちも、主の模範に倣う責任があります。ただし、それは罪の代価を支払うことにおいて**ではなく**(そのようなことは私たちには決してできません)、罪に抵抗することにおいてです。

(15) しかし、あなたがたを召してくださった方が聖なる方であるように、あなたがたもその行いのすべてにおいて聖なる者となりなさい。(16) 聖書に「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」と書かれているからである(レビ 11 章 44-45 節, 19 章 2 節)。(第一ペテロ 1 章 15-16 節)

キリストはあらゆることにおいて私たちの模範です。ですから、主に属する私たちは、罪のない主であり救い主である方の足跡に従い、常に「聖化を追い求める」、すなわち聖さを追い求めるべきなのです(ヘブル 12 章 14 節)。信仰において霊的成熟に達した人々は、その段階に到達するために必要な試練を受ける中で、「キリストの苦しみにあずかって」きました。このように、霊的成長、前進、実を結ぶ働きに対するあらゆる抵抗を乗り越え、さらに、自分の過ちによらない苦難による試練にも耐えることによって、すでに多くの苦しみを経験してきた成熟した信者は、すべてのクリスチャンの中でも特に、疲れ果てて霊的な前進を緩めたり、学んだ真理を生活に適用することがおろそかになって、聖さに欠ける行いに陥ったりしないよう、注意すべきです。イエス・キリストのためにすでに多くの苦しみを受けてきた成熟した信者こそ、すべてのクリスチャンの中でも特に、疲労のために霊的な前進から後退し、私たちが行うべき善いことを「行うのに疲れて」しまうこと(ガラテヤ 6 章 9 節)にも、不注意な態度によって「容易にまとわりつく罪」(ヘブル 12 章 1 節)に陥ることにも、断固として抵抗すべきなのです。御霊は、私たちがイエス・キリストの模範を思い起こすのを助けることによって、この二つの否定的な極端に陥らないよう助けてくださいます。

(1) こういうわけで、私たちも[11 章に登場する信者たちと同じように]、これほど大勢の証人たち[人間と天使の両方]に囲まれているのだから、あらゆる妨げとなるもの、特に私たちが習慣的に陥りやすい罪をすべて捨て去り、私たちの前に置かれた競走を忍耐をもって走り抜こうではないか。(2) 私たちの信仰の創始者であり完成者である(「アルファでありオメガである方」参照)イエスに目を向

---

[1] 聖書の基礎第 4 部 A「キリスト論」の第 II.4 節「キリストの血」を参照。

けながら走ろう。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、十字架の恥をものともせずに耐え忍び、神の御座の右に着座された。(3) 罪深い人々からご自身に向けられた、あれほど激しい敵対に耐え忍ばれた方のことを、いつも心に留めていなさい。それは、あなたがたが心をくじかれ、あきらめてしまうことのないためである。(ヘブル 12 章 1-3 節)

同じ心構え(1 節):

それゆえ、キリストが肉体において死なれたのだから、私たちも同じ心構えで武装すべきである。[イエスがそうであったように]肉体において苦しみを受けた者は、罪との関わりを断ったのだと[考えるべきである]。(第一ペテロ 4 章 1 節)

ここで「心構え」と訳されている言葉は、ギリシヤ語の ennoia(「中に」を意味する前置詞 en と、「思い」を意味する名詞 nous に由来する)です。ここでは「考え方」や「思考の型」と訳すこともできます。信者は、私たちの主がかつて持っておられ、今も持っておられるのと同じ心構え、考え方、思考の型を持つように命じられています。そして、私たちがその崇高な理想に少しでも近づくことを望める唯一の方法は、私たちの心を真理で満たすことです。その真理こそ、イエス・キリストご自身の思いなのです。

「だれが主の思いを知って、主を教えることができようか。」しかし、私たちはキリストご自身の思いを持っている(すなわち、キリストご自身の思いを表している聖書を持っている)。(第一コリント 2 章 16 節)

確かに、ペテロはここで、この原則を特に罪深い行いに抵抗することに当てはめています。しかし、主の考え方、したがって主の物事への取り組み方に倣うというこの目標は、信者が何を考えるときにも心に留めておくべきものです。なぜなら、私たちが考えていることは、私たちの言葉や行動にも必ず表れるからです。

そこでイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしの弟子になりたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なければならない。」(マタイ 16 章 24 節 /NIV 訳)

イエス・キリストに従うためには、自己を否定すること(すなわち、世的な優先事項よりも霊的な優先事項を重んじること)、永遠の命を得るために主を信頼したときに誓った主への忠誠をしっかりと受け入れること(すなわち、十字架と、私たちのためにささげられた主の犠牲、そしてそれに対する私たちの感謝の応答を、心の中心に据え続けるこ

と)、そして主が導かれるところならどこへでも従って行くこと(すなわち、霊的成長、前進、実を結ぶ働きにおいて、御霊を通して与えられる主の導きに応じること)が必要です。クリスチャン生活のこれらすべての面は、私たちがイエス・キリストに目を注ぎ続けることを学べば、はるかに容易になります。そして、そうしなければ、実際のところ、ほとんど不可能になってしまうのです。

私は主に申し上げる。「あなたこそ私の主。あなたを離れて、私には良いものは何一つない。」(詩篇 16 章 2 節)

私はいつも主を自分の前に置いている。主が私の右におられるので、私は揺るがされることがない。(詩篇 16 章 8 節)

私の目は絶えず主に向けられている。主だけが私の足をわなから解き放ってくださるからである。(詩篇 25 章 15 節 /NIV 訳)

主をあなたの喜びとしなさい。そうすれば、主はあなたの心の願いをかなえてくださる。(詩篇 37 章 4 節 /NIV 訳)

天において、私にはあなたのほかにだれがいるだろうか。地上でも、あなたのほかに私が望むものは何もない。(詩篇 73 章 25 節 /NIV 訳)

しかし、主なる神よ、私の目はあなたに注がれている。私はあなたに身を避ける。私を死に渡さないでください。(詩篇 141 章 8 節 /NIV 訳)

私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。(ピリピ 1 章 21 節)

(8) あなたがたは、まだ一度も主を見たことがないが、主を愛している。また、今この時も主を見ることはできないが、それでも主を信じている。そのため、あなたがたは、やがて来る栄光に満ちた将来を予感させる、言葉に言い表せない喜びに満たされている。(9) それは、あなたがたの信仰の目的であり目標でもある究極の賞、すなわち、あなたがたの命の救い(文字どおりには「救済」)を、勝利のうちに獲得することになるからである。(第一ペテロ 1 章 8-9 節)

なぜなら、[モーセは]目に見えない方を見ていることによって(すなわち、目に見えない主イエス・キリストを心の目で見つめ続けることによって)、強くなったか

らである。(ヘブル 11 章 27 節後半)

……私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエスに目を向けながら。(ヘブル 12 章 2 節前半)

武装しなさい(1 節):

それゆえ、キリストが肉体において死なれたのだから、私たちも同じ心構えで武装すべきである。[イエスがそうであったように]肉体において苦しみを受けた者は、罪との関わりを断ったのだと[考えるべきである]。(第一ペテロ 4 章 1 節)

聖書が軍事的なたとえを頻繁に用いていることについては、以前にも取り上げました。[2] これは驚くことではありません。戦争はクリスチャン生活を描写するのにまさにふさわしいものだからです。私たち信者は、この悪魔の世界において敵の領域に身を置いています。その結果、私たちは、目に見えるものと見えないものの両方を含む、悪しき者の勢力との命がけの戦いの中に絶えず置かれているのです。[3]

なぜなら、私たちの戦いは血肉に対するものではなく、[天使の]支配者たち、[天使の]権威者たち、この[現在の]暗闇を支配する宇宙的な勢力、天上の領域にいる悪の霊たちに対するものだからである。(エペソ 6 章 12 節)

身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔は、ほえたける獅子のように歩き回り、だれかを食い尽くそうと探し求めている。(第一ペテロ 5 章 8 節)

私たちのこの戦いは、肉体的なものではなく(カルト集団が時としてそのように解釈してきたことがあります。「十字軍」を参照)、霊的なものです。したがって、私たちが戦いに用いる武器もまた、霊的なものです。

しかし、私たちは昼に属する者なのだから、慎み深くあり、信仰と愛を胸当てとして身につけ、救いの希望をかぶととしてかぶろう。(第一テサロニケ 5 章 8 節

---

[2] 聖書の基礎第 6 部 A「ペリパテオロジー(クリスチャンの歩みについての教理)」の II.2.D.「軍事的なたとえ」を参照。

[3] 「サタンの反乱」第四部「サタンの世界体制」の I.「悪魔の領域における寄留者たち」<リンク先ファイルの 4 頁-/A4 印刷本「サタンの反乱」の 175 頁-第四部「悪魔の世界の寄留者」>を参照ください。

/NIV 訳; 参照:イザヤ 59 章 17 節)

(10) ですから、何が起ころうとも、主から力を得て、その偉大な御力によって強められなさい。(11) 悪魔の策略に対してしっかりと立つことができるように、神の武具をすべて身につけなさい。(12) 私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、[天使的な]支配者たち、[天使的な]権威者たち、この[現在の]闇を支配する宇宙的な勢力、天上の領域にいる悪の霊たちに対するものだからです。(13) このことを心に留め、悪があなたがたを取り囲む日に、その攻撃に抵抗し、自分の立場を守り抜くことができるように、神の武具をすべて身につけなさい。そうすれば、自分のなすべきことをすべて果たしたうえで(すなわち、それまでに霊的に成長し、現在直面している状況に霊的な真理を適用したうえで)、しっかりと立ち続けることができます。(14) ですから、真理を腰に帯び、義の胸当てを身につけて、しっかりと立ちなさい。(15) また、平和の福音を[伝える]備えを、履物のように足に着けなさい。(すなわち、キリストへの信仰によって神と和解できるという福音を伝える備えです)。(16) そして、どんなときにも信仰の盾を取りなさい。それによって、悪しき者の放つ火の矢をすべて消し止めることができます。(エペソ 6 章 10-16 節)

私たちが召されている、この目に見えない霊的な戦いに勝利するためには、「武装する」必要があります。そして、それは神の御言葉の真理によってのみ可能なのです。

そして、[この霊的な戦いにおいて]救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち真理の御言葉を身につけなさい。(エペソ 6 章 17 節)

さて、ここでの文脈において、私たちが自分の人生に対する神の御心を実行するために身につけるべき特別な「武具」とは、ほかでもないイエス・キリストご自身の考え方です。聖書の中で「武具を身につけなさい」と教えている箇所は、基本的にすべてこのことを語っています。例えば、まず真理を「食べ」、信仰によってそれを十分に消化し、自分のものにしていなければ、義にかなった考え方や希望に満ちた考え方を持つことはできません。真理をそのように身につけてこそ、試練のときに、御霊の導きに応じて「真理の剣」を用いる意志と能力を持つことができるのです。御霊は、私たちがこの人生で直面するどのような状況に対しても、真理を実際に適用して応答できるよう、私たちの内に蓄えられた真理を働かせてくださいます。そして、ここでの文脈において私たちが直面している具体的な課題は、罪に抵抗することなのです。

肉体において苦しみを受けた者は、罪との関わりを断っている(1 節):

ですから、キリストが肉体において死なれたのだから、あなたがたも同じ心構えで武装しなさい。肉体において[イエスと同じように]苦しみを受けた者は、罪との関わりを断っている[と考えるべき]だからである。(第一ペテロ 4 章 1 節)

イエス・キリストを信じる者として、私たちは罪から贖われています(ガラテヤ 3 章 13 節; エペソ 1 章 7 節; コロサイ 1 章 14 節)。したがって、キリストにある私たちの立場という点では、愛する救い主と一つにされている者として、私たちは聖なる者、聖別された者、罪のない者なのです(ローマ 8 章 1 節; 使徒行伝 26 章 18 節; 第一コリント 6 章 11 節; ヘブル 10 章 10 節, 14 節参照)。さらに、復活した後には、私たちは最終的に罪から完全に解放され、永遠にその状態に置かれます。しかし、その間、私たちは救われた後も、依然として罪の性質に侵された肉体を持ったまま、この世に残されています。そして、最終的な解放を待ち望みながら、日々の実際の生き方を、神の御前における自分たちの立場にふさわしいものにしていくことが、私たちの務めであり、召しなのです。私たちはイエス・キリストに従う者であり、あらゆる召しの中で最も崇高なこの召しにふさわしく行動する義務があるのです。

(1) ですから、あなたがたはキリストとともに[立場の上で]復活させられたのだから、神の右に座しておられるキリストのいる、上にあるものを求め続けなさい。(2) 地上のものではなく、上にあるものに心を向け続けなさい。(コロサイ 3 章 1-2 節)

(7) あなたがたも以前は、これらのものに支配されて生きていたとき、そのような歩みをしていた。(8)しかし今は、怒り、憤り、悪意、そしり、そして口から出る[あらゆる]汚れた言葉を、すべて捨て去りなさい。(9)互いに偽りを言うことをやめなさい。あなたがたはすでに「古い人」を脱ぎ捨て、(10)「新しい人」を身につけたのだから。この新しい人は、造り主のかたちに[倣う者となる]ため、[真理についての]十分で従順な知識(エピグノーシス epignosis)を[得る]ことを目指して、絶えず新しくされているのである。(コロサイ 3 章 9-10 節)

ペテロはこの手紙をクリスチャンたちに宛てて書いています。その中には、信仰生活を長年続けてきた人も多く、また、信仰のゆえに厳しい試練や不当な苦しみを耐え忍んできた人も大勢いました。ペテロが言おうとしているのは、霊的に成長し、前進するために、時には苦痛を伴う犠牲を払ってきた私たちすべてにとって、これまでに払ってきた代価を忘れず、後戻りしないことが大切だということです。私たちは、霊的な成熟をもたらし、この霊的な戦いにおいて経験豊かな戦士となるために必要な試練や苦難を

耐え忍んできたのです(ヤコブ 1 章 2-4 節, 12 節; 第一ペテロ 1 章 3-9 節)。ですから、それまでに払ってきた犠牲がまるで何の意味もなかったかのように、後戻りすることを自分自身に許してはなりません。私たちは主に倣って苦しみを受けたとき、自分たちにとってこの世は何の価値もないということを、行動によって表明したのです。したがって、これまで霊的な戦いで積極的に攻めて成果を上げてきたのに、今になって罪深い行いに逆戻りし、十分な守りを固めなかったために、霊的な前進によって勝ち取ったものを失い、それまでの成果を台無しにしてはならないのです。すべての信者は最後まで忍耐し続ける必要があり、過去の成果に満足して努力をやめるという過ちを犯してはなりません。そのような態度はキリストに栄光を帰するものではなく(確実に霊的な破滅へと至る道でもある)からです。

(32) あなたがたが初めて光を受けたころ、激しい苦難と虐待の中を耐え忍んだ、あの日々を思い起こしなさい。(33) あなたがたは、公然と辱められ、迫害を受けたこともあれば、同じような目に遭っている人々と苦しみを分かち合ったこともあった。(34) あなたがたは、私が鎖につながれていることをともに苦しみ、また、自分たちにはもっと価値があり、いつまでも残る財産があると知っていたので、持ち物を奪われても喜んで受け入れた。(35) ですから、あなたがたのこの確信を捨ててはならない。それには大きな報いが伴うのだから。(36) あなたがたには忍耐が必要である。それは、神の御心を行い終えた後、約束されたものを勝利のうちに受け取るためである。(37) もうしばらくすれば、ほんのわずかな時が過ぎれば、来たるべき方が来られる。決して遅れることはない。(38) 「そのとき、わたしの義人は、その信仰によって生きる。しかし、もし後ずさりするなら、わたしの心はその者を喜ばない」(ハバクク 2 章 3-4 節)。(ヘブル 10 章 32-38 節)

もはや欲望に従って生きることのないために(2 節):

……それは、[私たちも主と同じように]地上での残された生涯を、もはや人間の情欲に従ってではなく、神の御心に従って生きるためである。(第一ペテロ 4 章 2 節)

もし私たちが霊的な生活において、不当な苦しみを受ける試練、すなわちキリストの苦しみにあずかる試練を任せられるほどにまで成長しているのであれば、それに伴う責任を引き受け、一定の聖化の水準にふさわしい生き方をすべき時が、すでに来ているのです。それは、完全に罪を犯さなくなること(それは不可能です)ではありませんが、少なくとも、クリスチャンとしての証しを著しく損なうような、明らかで重大な罪をすべ

て避けることは当然含まれます。成熟したクリスチャンは、日々の生活でどれほど激しい「砲火」を浴びようとも、**この**地上での**今の**人生は非常に短く、これから来る新しい命と新しい世界に比べれば、はるかに重要性が低いという認識を、人生観の基本として持ち続けています。したがって、この世の生活やこの世界のことを過度に気にかけること、ましてや、この世の欲望に屈してクリスチャンとしての証しを汚してしまうほど、この世のことに心を奪われることは、私たちが召されている生き方とは正反対なのです。

ここでの文脈において、「情欲」に当たるギリシヤ語の epithymia（エピテュミア）は、「欲求」を意味する pathema（パテーマ、例えばガラテヤ 5 章 24 節）と区別されることがあります。前者は、私たちを重大な罪へと引き寄せる、不正なものを積極的に追い求める欲望（ペテロが以下で具体的に述べるようなもの）を表すのに対し、後者は、不安や不安定さの問題を解決するために、世俗的な手段（例えば金銭への愛）に頼るよう駆り立てる圧力に屈しやすい傾向を指します。ここでペテロは、この言葉を、罪の性質がこの世の誘惑を追い求めるときに生じる、あらゆる誘惑や圧力を表すために用いています。そのようなとき、信者は「神の御心」に従うのではなく、誤ったものに心を動かされ、それに応じて行動してしまうのです。私たちは、主が自分たちに何を望んでおられるかをよく知っています。圧力や誘惑に屈して、明らかに主の喜ばれないことを行うのは、霊的に危険なことです。神からの懲らしめを経験したことのない信者は一人もいないのですから、私たちは皆、そのことをよく知っているはずです（ヘブル 12 章 8 節）。キリストの考え方で「自分自身を武装する」こと、すなわち、常に主の模範に目を向けるよう熱心に自分を訓練し、さらに、これまで主に従う中で耐えてきた苦しみを心に留めることは、狭くまっすぐな道を歩み続けるための大きな励みとなるはずです。それによって、左にそれて（欲望に駆られて神を敬わない快楽を追い求めること）、あるいは右にそれて（恐れに駆られてこの世の安定や保障を必死に追い求めること）しまわずに済むのです。この二つの誤った選択をどちらも退けることによって、私たちは厳しい懲らしめや霊的な破滅の危険から自分自身を守るだけでなく、この世においては祝福の道を（たとえ世の人々の目には祝福と映らなくても、それは真の祝福です）、そして来たるべき世においては永遠の報いへと至る道を歩むことになるのです。

> 正しい者の道は、夜明けの光のようだ。その光は、ますます輝きを増して真昼の明るさに至る。（箴言 4 章 18 節 /NIV1985 訳）

> そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。」（マタイ 16 章 24 節 /NKJV 訳）

過去に罪の中で生きてきた時間はもう十分である（3 節）：

あなたがたは、これまでの人生ですでに、異邦人（すなわち、不信者）が好むことを行うのに十分な時間を費やしてきた。彼らは、みだらな行い、情欲、暴飲暴食、乱痴気騒ぎ、酒宴、そして［その他の］不法な偶像礼拝にふけりながら［人生を］歩んでいる。（第一ペテロ 4 章 3 節）

長年身についた行動を変えるのは難しいことが多く、特に悪い習慣についてはそうです。アウグスティヌスが「私に貞潔と節制をお与えください。しかし、今すぐにではありません」と祈った、あの嘆かわしい祈りの場合と同じように、ペテロも自分の訴えに対して抵抗があることを明らかに予想しており、そのため、さらに強い言葉で説得する必要があると感じたのです。ここでペテロは、読者たちが過去にすでに十分すぎるほど罪を犯してきたことを思い起こさせ、彼らに恥を自覚させようとしています。それは些細な罪ではなく、当時のその地域に住む救われていない異邦人に典型的に見られたような堕落した行い、すなわち「放蕩、情欲、暴飲暴食、乱痴気騒ぎ、酒宴、そして[その他の]不法な偶像礼拝」です。こうした不快で恥ずべき行いを異邦人、すなわち、今や私たち信者がその一員となっている「神のイスラエル」（ガラテヤ 6 章 16 節）とは対照的な不信者の行いとして位置づけることは、二重の侮辱に当たります。それは明らかに、読者たちの注意を強く引くためのものでした。というのも、彼らの中には、今なお（どうやら）そのような行いを続けている人がいるからです。それは実に恥ずべきことであり、霊的にも非常に危険なことなのです。

あなたがたは、今では恥じているようなことから、その当時どんな実を得ていたのか。それらの行き着く先は、**死**だからである（すなわち、自分の生き方を改めようとしない信者にとっては肉体の死である「死に至る罪」、あるいは、その結果として信仰を捨てる者にとっては、背教による霊的な死）。（ローマ 6 章 21 節 /NKJV 訳）

この世で私たちに与えられている時間は短く、しばしば私たちが考えている以上に短いものです。「愚かな金持ち」のたとえ話に登場する男は、自分の豊かさを楽しむために、まだ何年も時間があると思っていました。しかし、主はその夜のうちに彼の命を取り去られました（ルカ 12 章 13-21 節）。主との関係を正し、自分の罪を告白し、今行っているどのような汚れた行いからも悔い改めるべき時は、まさに**今日、今この時**なのです。明日があるとは限らないからです。

(4) 主よ、私の終わりと、私の日数がどれほどあるのかを教えてください。私の命がいかにはかないものであるかを知らせてください。(5) あなたは私の

日々を、わずか手の幅ほどの長さにされました。私の生涯の長さなど、あなたの御前では無に等しいものです。どれほど安泰に見える人であっても、すべての人はただ一息のようにはかない存在です。(詩篇 39 篇 4-5 節 /NIV 訳)

私たちに自分の日々を数えることを教え、知恵の心を得させてください。(詩篇 90 篇 12 節 /NIV 訳)

放蕩、その他の罪(3 節):

あなたがたは、これまでの人生ですでに、異邦人(すなわち、不信者)が好むことを行うのに十分な時間を費やしてきた。彼らは、みだらな行い、情欲、暴飲暴食、乱痴気騒ぎ、酒宴、そして[その他の]不法な偶像礼拝にふけりながら[人生を]歩んでいる。(第一ペテロ 4 章 3 節)

まず注目すべきなのは、「みだらな行い、情欲、暴飲暴食、乱痴気騒ぎ、酒宴、そして[その他の]不法な偶像礼拝」というこの一覧が、決してすべての罪を網羅するものではないということです。ペテロは、読者たちの注意を引くために、特に目立ち、誰が見ても非難に値し、当時あまりにも一般的だった行いを選んで挙げています。しかし、最後に「[その他の]不法な偶像礼拝」を付け加えることで、この一覧が、当時の読者であれ現代の読者であれ、現在行っている、あるいは過去に行っていた、同じようなあらゆる罪深い行為にまで及ぶことを示しています。つまり、この最後の項目によって、自分が特に好んで犯している罪が具体的に挙げられていないからといって、「自分は問題ない」と考えることはできないと明確にしているのです。不法なこと(すなわち、神によって禁じられていることすべて:第一ヨハネ 3 章 4 節)であれ、偶像礼拝に当たること(すなわち、神の御心よりも自分自身や自分の欲望を優先すること、自分を捨てることの正反対:エペソ 5 章 5 節; コロサイ 3 章 5 節; マタイ 16 章 24 節参照)であれ、ここで具体的に名前が挙げられていなくても、同じように非難されるべきものなのです。

(19) 肉の性質の働きは明らかである。それは、性的不品行、みだらな行い、放蕩、(20) 偶像礼拝、魔術、憎しみ、争い、ねたみ、激しい怒り、利己的な野心、不和、分派、(21) そして、そねみ、泥酔、乱痴気騒ぎ、**およびこれらに類するあらゆること**である。以前にも警告したように、今もあなたがたに警告する。このような生き方をする者は、天の御国を受け継ぐことができない。(ガラテヤ 5 章 19-21 節)

ペテロは、当時の社会(そして現代でも)誰もが行き過ぎた行為だと認めるような、不信者に見られる特にひどく、あからさまな罪をいくつか取り上げています。それは、信

者と不信者の行動の違いを、できる限り鮮明に示すためです。というのも、主が信者に長く続けることをお許しにならない罪があるからです。もちろん、私たちは皆、罪を犯します。しかし、神への畏れを少しも示さず、傲慢にも神を無視して犯す、度を越した重大な罪、すなわち「故意に大胆に犯す罪」は、信仰から離れて背教へと向かっている兆候である可能性があり、あるいは、「死に至る罪」という、最も恥ずべき結末によって、この世から命を取り去られる結果を招くこともあります。[4]

> (12) だれが自分の過ちを悟ることができるでしょうか。隠れた過ちから私を清めてください。(13) あなたのしもべを、思い上がって犯す罪からも守ってください。そのような罪が私を支配することのないようにしてください。そうすれば、私は責められるところのない者となり、大きな罪を犯さずに済むでしょう。(詩篇 19 篇 12-13 節 /NKJV 訳)

不信者たちの驚きと中傷(4 節):

> [不信者たちは間違いなく]、あなたがたが自分たちと同じように、そのような度を越した放蕩に加わろうとしないことを不思議に思い、そのためにあなたがたの名誉を傷つけるような悪口を言うのである。(第一ペテロ 4 章 4 節)

ほとんどの信者は、世俗的な知人や親戚、あるいは職場の人々から、不信者の間ではごく普通に行われているさまざまな行為に、自分たちが加わろうとしないことを驚かれた経験があるのではないでしょうか。私たちは主を畏れるがゆえに、そのような行為から距離を置いているのです。例えば、人の噂話をしないことかもしれません。あるいは、主の御名をみだりに口にしないこと、職場のクリスマスパーティーで飲みすぎないこと、異性との軽率な戯れを避けることなどかもしれません。さらに、神や聖書について肯定的な発言をすることも加われば、私たちがしばしば仲間外れのように扱われるのも、実際には「驚く」ことではありません。それだけではありません。私たちはしばしば、自分たちを「他の人よりも聖なる者」だと思い込んでいる人間として見下されることがあります。周囲の人々は、私たちの良い行い(そして悪い行いを避けること)に反感を抱くからです。こうした二つの傾向は、たいてい周囲に同調することで満足している不信者たちにとっては、どちらも「驚くべき」ことなのです。特に、流れに逆らうことは難しいだけでなく、望まない否定的な注目を浴びることにもなるからです。そのため、私たちが「彼らと一緒にそのような度を越した放蕩に加わろうとしない」ことは、彼らの目には、私たちが自分たちを彼らよりも優れた者と考え、彼らを見下しているように映ることさえありま

---

[4] 聖書の基礎第 3 部 B「罪論(Hamartiology)」IV.6.「背教と死に至る罪」を参照。

す（それは、不信者であっても心の奥底では自分たちの生き方の愚かさを認識しているからにすぎないのかもしれません）。

確かに、律法主義的な信者（したがって、定義上、霊的に未熟な信者）の多くが、実際にそのような人を裁く態度を持っており、しかも、求められてもいないのに、その態度をしばしばあからさまに示すことがあるのは事実です。しかし、ペテロがここで言っているのは、そのようなことではありません。むしろペテロは、私たちの異なる生き方に反感を抱く不信者たちが驚き、必然的に不快な反応を示すことについて述べているのです。それは、私たちが言葉で彼らを裁いたり、自分たちの行動の方が彼らの行動より優れていると公然と主張したりするからではありません（成熟した信者は、ただそっとしておいてもらうこと、そして他の人々も、私たちが真理だと知っているその真理にたどり着くことだけを望んでいます）。そうではなく、不信者たちが、私たちの良い行いを、自分たちの悪い行いに対する遠回しな非難だと受け取るからなのです。どれほど不合理に思えても、彼らはそのように解釈するのです。それによって彼らは居心地の悪さを感じます。その理由の一つは、自分たちが人生について当然のこととして受け入れている根本的な考え方を、見直さざるを得なくなるからです。そして、不信者にとって、真の裁き主、すなわち、やがて下される神の裁きによって自分が吟味されることほど、不快なことはありません。特に、自分の生き方を変えるつもりのない人々にとっては、なおさらそうなのです。

> パウロが義と自制と来たるべき裁きについて語ると、フェリクスは恐ろしくなり、「今はもう十分だ。下がってよい。都合のよい時が来たら、また呼ぶことにしよう」と言った。（使徒行伝 24 章 25 節 /NIV 訳）

このように、信者が当然示すべき「善良さ」は、不信者である知人たちが私たちを非難しようとしても、正当な非難の理由を何一つ見いだせないようにするものです（テトス 2 章 8 節）。また、私たちの周囲にいる不信者のうち、まだ真理に対して心をかたくなにしていない人々にとっては、私たちが示す証しが、心を変えるきっかけになる可能性もあります。その証しとは、単に目に余るような悪い行いを避けるだけでなく、主に栄光を帰する善良で立派な生活を送り、この世のものを過度に追い求める野心も見せないことです。ペテロがすでに説明しているとおりです。

> 異邦人（すなわち、不信者）の間で、[道徳的に]良い生活を送りなさい。それは、彼らがあなたがたを悪を行う者として中傷しても、あなたがたの良い行い（すなわち、生活と働き）を見て、訪れの日には[ついに]神に栄光を帰するようになるためである。（第一ペテロ 2 章 12 節）

しかし、自分自身の非を認めまいと決めている人々については、自分の非を他人のせいにするのが人間の性質です。そのため、私たちは正しいことを行っているにもかかわらず、中傷されることを覚悟しておかなければなりません。そのような不当な中傷は、心に痛みを与えるかもしれません。誰でも悪く言われるのは嫌なものです。しかし、すべてのことにおいて主に自分自身を委ねている私たちは、そのような根拠のない非難を、実際には何も恐れる必要がありません。最終的に、そのような不当な中傷が私たちに害を及ぼすことは許されないからです。

雀が飛び回り、つばめが飛び去るように、理由のない呪いは、その相手に降りかかることはない。(箴言 26 章 2 節 /NIV 訳)

申し開き(5 節):

しかし、彼らは、生きている者(すなわち、あなたがた信者)と死んだ者(すなわち、あなたがたに敵対する不信者)を裁く備えをしておられる方に、[これらすべてについて]申し開きをしなければならない。(第一ペテロ 4 章 5 節)

私たちに敵対し、不当に中傷する人々に対して、信者は常に、過度に動揺したり、自分の手で問題を解決しようとしたりしてはならないことを、しっかりと心に留めておく必要があります。私たちの裁き主は天におられ、私たちの正しさを明らかにしてくださいます(ローマ 12 章 19 節)。そして私たちは、あらゆる反対にもかかわらず祝福されるだけでなく、実際には、その反対を受けることによっても祝福されるのです。

(11)「わたしのために、人々があなたがたをののしり、迫害し、偽ってあらゆる悪口を言うとき、あなたがたは幸いである。(12) 喜び、大いに喜びなさい。天におけるあなたがたの報いは大きいからである。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」(マタイ 5 章 11-12 節 /NKJV 訳)

「人々が人の子のためにあなたがたを憎み、仲間外れにし、ののしり、あなたがたの名を悪いものとして退けるとき、あなたがたは幸いである。(23) その日には喜び、躍り上がって喜びなさい。見よ、天におけるあなたがたの報いは大きいからである。彼らの先祖も、預言者たちに同じようなことをしたのである。」(ルカ 6 章 22-23 節 /NKJV 訳)

私たちが信者として正しいことを行っているという理由で、キリストのゆえに私たちに

敵対し、攻撃し、中傷する人々は、神の裁きを受けることになります。

1) 最後の裁きにおいて:

「見よ、主は幾万もの聖徒たちを伴って来られる。(15) それは、すべての者を裁き、不敬虔な者たちが不敬虔な仕方で行ったすべての不敬虔な行いと、不敬虔な罪人たちが主に逆らって語ったすべての激しい言葉について、彼らの罪を明らかにするためである。」(16) 彼らは不平を言う者、不満をこぼす者(文字どおりには「自分の境遇を責める者」)であり、自分自身の欲望に従って歩んでいる。(ユダ 1 章 14 節後半-16 節前半 /NKJV 訳)

2) 再臨において:

(5) [あなたがたが耐えているこれらの苦難は]、神の正しい裁きの証拠である。それは、あなたがたが、そのために苦しみを受けている神の御国にふさわしい者であると、神が[判断して]おられることを示している。(6) 実際、あなたがたを苦しめている者たちに苦難をもって報いることは、神にとって正しいことであり、(7) また、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに安息を与えることも正しいことなのである。それは、主イエスが力ある御使いたちを伴って天から現れ、(8) 炎の中で、神を知らず、私たちの主イエスの福音に従わない者たちに報復されるときに実現する。(9) 彼らは、主の御前とその御力の栄光から遠ざけられ、永遠の滅びという刑罰を受けることになる。(10) その[偉大な]日に主が来られるのは、ご自分の聖徒たち(すなわち、復活した信者たち)の間で栄光を受け、信じたすべての者たちの間で驚嘆されるためである。あなたがたも私たちの証しを信じたので、その中に含まれている。(第二テサロニケ 1 章 6-10 節)

3) さらに、この世においても、彼らが私たちに対して企てることはすべて失敗に終わります:

「あなたに向かって造られるどのような武器も成功することはなく、あなたを訴えるすべての舌に対して、あなたはその誤りを明らかにする。これが主のしもべたちの受け継ぐものであり、彼らの正しさを証明するものとして、わたしが与えるものである。」(イザヤ 54 章 17 節 /NIV 訳)

死んだ者たちに宣べ伝えられた福音(6 節):

まさにこの理由から、[あなたがたに対してと同じように][霊的に]死んでいる者たちにも福音が宣べ伝えられたのである。それは、彼ら[もまた]、[自分たちの]人間としての行いに従って肉体において罪を指摘された後、神[の恵み]に従い、御霊によって生きるようになるためである。(第一ペテロ 4 章 6 節)

不信者、すなわち霊的に「死んでいる」者たちに福音が宣べ伝えられた「まさにこの理由」とは、前の節で述べられている裁きのことです。不信者が滅ぼされ、罪に定められることは、神が最も望んでおられないことなのです。父なる神は、すべての人が救われることを望んでおられます(エゼキエル 18 章 23 節; マタイ 18 章 14 節; ヨハネ 12 章 47 節; 使徒行伝 17 章 27 節; 第一テモテ 2 章 4 節; 第二テモテ 2 章 24-26 節; 第二ペテロ 3 章 9 節; 哀歌 3 章 33 節参照)。そして、イエス・キリストは、彼らが救われるように、彼らのすべての罪の代価をすでに完全に支払ってくださいました。それは、実に計り知れないほど大きな代価でした(ヨハネ 1 章 29 節; ローマ 5 章 18 節; 第二コリント 5 章 14-15 節; 第一テモテ 2 章 5-6 節前半; 第一ヨハネ 2 章 2 節)。ここで御霊によって表されているペテロの願いは、すべての不信者が「[自分たちの]人間としての行いに従って肉体において罪を指摘される」ことです。つまり、私たちの姿を目にすることを通して、また神が彼らの人生に直接働きかけられることを通して、自分たちの行いが死に値するものでしかないことに気づかされることです。そうすることで、彼らがイエス・キリストに立ち返って救われ、福音の真理に応答することによって、「神[の恵み]に従い、御霊によって」永遠の命を得るようになるためです。私たちの主が再臨される前に、この福音はすべての人に宣べ伝えられます(黙示録 14 章 6 節; マタイ 10 章 23 節参照)。しかし、神がすべての人の救いを望んでおられ、また私たちが言葉による証しと生活による証しの両方を通して福音のために努力しているにもかかわらず、救われるのは、イエス・キリストという賜物に示された神の恵みに進んで応答する者たちだけなのです。

「御子を信じる者は裁かれない。しかし、信じない者はすでに裁かれている。神のひとり子の名を信じていないからである。」(ヨハネ 3 章 18 節 /NASB20 訳)

第二段落(7-11 節)

(7) すべてのものの終わりが近づいている。それゆえ、思慮深く行動し、祈り[のため]に身を慎んでいなさい。(8) 何よりも、互いに対する愛をしっかりと保

ち続けなさい。なぜなら、「愛は多くの罪を覆う」からである（箴言 10 章 12 節; ヤコブ 5 章 20 節参照）。(9) 不平を言わずに、互いにもてなし合いなさい。(10) [私たち]一人ひとりが[それぞれの霊的な]賜物を受けているのだから、神の多様な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合おうではないか。(11) 語る者がいるなら、神から直接与えられた言葉を語るかのように語りなさい。奉仕する者がいるなら、神が与えてくださる力によって奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神がほめたたえられるためである。栄光と力が、とこしえにキリストのものであるように。アーメン。（第一ペテロ 4 章 7-11 節）

終わりが差し迫っていること（7 節）：

すべてのものの終わりが近づいている。それゆえ、思慮深く行動し、祈り[のため]に身を慎んでいなさい。（第一ペテロ 4 章 7 節）

ペテロは、最後の裁きと、イエス・キリストにおいて与えられた神の偉大な恵みの賜物に応じなかった不信者たちの運命について、私たちに思い起こさせたばかりですが、ここではさらに、永遠の観点こそが私たち自身の心の中でも何よりも優先されるべきものであることを思い起こさせています。この一時的な人生において、どれほどのことを成し遂げたとしても、霊的な事柄における最も小さな成果の重要性には到底及びません。なぜなら、前者は一時的なものですが、後者は永遠に残るからです。また、この世で主を離れて得たものは、富も、権力も、名声も、財産も、どのような楽しみも、キリストの裁きの座の前で焼き尽くされるときには、私たちの顔にわずかな笑みさえもたらすことはできないでしょう。そして、そのような「幸福」を追い求めることが、私たちの霊的成長、前進、実を結ぶ働きの妨げとなっていたなら、煙が晴れたとき、この地上で過ごした時間の成果として示せるものが、ほとんど何もないことに気づくかもしれません。主から「よくやった！」というお言葉をいただくにふさわしい「金、銀、宝石」が何もなく、それによって主に栄光を帰し、私たち自身も永遠にわたって喜びを味わうことができないかもしれないのです。

教会時代は、奥義の時代であるというその性質上、終わりの時代の入り口に位置しています。終わりの時代が始まる前に、成就されなければならない預言は、もはや何も残っていません。神のご計画において現在の延期が生じているのは、キリストの体を完成させる必要があるためだけです。この延期は、ユダヤ教の祭儀暦において、秋の祭りと翌春の祭りとの間にある空白期間によって表されています。今では、この中断期間がほぼ二千年に及んでいることが分かっています。それは二つの「千年の日」に相当

し、創世記における空白期間の向こう側で起こったサタンの反逆に対する裁きによって荒廃した世界を、神が再建された七日間のうち、最後から二番目と三番目の日に対応しています。しかし、教会時代を挿入するための中断期間の長さは、ユダヤ暦と再創造の七日間、さらにその他の聖書的証拠に基づいて、以前から予測可能であったとはいえ、神は常に、ご自身の御心のままに事態を早める自由を持っておられました。そのため、また、ペテロの時代でさえ、終わりの時代が直ちに到来することと矛盾する預言は何もなかったため、聖書はこの奥義の時代を通して一貫して、終わりの時代が「差し迫っている」ものとして描いているのです。今日、あらゆる意味においてまさに終わりの時代の入り口に立っている私たちにとって、ここでのペテロの言葉は、いっそう強く心に響くべきものです。ペテロは読者たちに切迫感を抱かせ、あらゆる間違ったことや問題のあることから離れ、代わりに霊的成長、前進、実を結ぶ働きに熱心に取り組むよう促そうとしているのです。私たちは、この言葉を極めて真剣に受け止めなければなりません。私たちは間もなく主にお会いすることになります。そうであるなら、私たちはどのように生きるべきなのでしょうか。

> (10) 主の日は盗人のようにやって来る。その日には(すなわち、その日の進行の中で)、 天は轟音とともに消え去り、諸元素は燃え上がって溶け去り、地とその上で行われたすべてのことは、[主の御前で調べられるために]あらわにされる。(11) このように宇宙が溶け去ることになるのだから、私たちはどのような者であるべきだろうか。聖く敬虔に[歩み]、(12) 神の日(すなわち、永遠の日)が来るのを熱心に待ち望む者であるべきではないか。その日には、天は炎に包まれて溶け去り、諸元素は燃え上がって溶ける。(13) しかし、私たちは主の約束に従って、義の宿る新しい天と新しい地[すなわち、そのような世界]を待ち望んでいる。(第二ペテロ 3 章 10-13 節)

思慮深さと慎み(7 節):

> すべてのものの終わりが近づいている。それゆえ、思慮深く行動し、祈り[のため]に身を慎んでいなさい。(第一ペテロ 4 章 7 節)

ここで使われている「思慮深さ」と「慎み」という二つの言葉は、信者が罪への誘惑や圧力に直面したとき、常に示すべき自制心を、合わせて要約したものです。前者はギリシヤ語の sophroneo(ソーフロネオー)で、ここでは「思慮深く行動する」と訳していますが、主に思考面での自制を指しています。一方、後者はギリシヤ語の nepho(ネーフォー)で、ここでは「身を慎む」と訳していますが、主に身体的な行動の自制を指しています。sophron(ソーフローン)であるとは、文字どおりには「健全な思いを持っている」とい

う意味であり、ギリシヤ語とその文化においては、悪い影響や疑わしい行動をすべて慎重に避けようとする心構えを持つことを意味します。nephon（ネーフォーン）であるとは、文字どおりには飲酒を控えることを意味しますが、ここでのように、より広い意味で用いられることも多く、あらゆる種類の度を越した有害な行動を慎むことを指します。この二つの類義語を合わせることで、聖書の中でしばしば「自制」（ギリシヤ語 egkrateia：使徒行伝 24 章 25 節; 第一コリント 7 章 9 節, 9 章 25 節; ガラテヤ 5 章 23 節; テトス 1 章 8 節; 第二ペテロ 1 章 6 節）と呼ばれるものを要約し、ペテロの教えを強調しています。現代の日常的な言葉で言えば、「そんなことはするな。考えることさえするな！」という意味です。これは、あらゆる重大な罪（上の 3 節で言及されている「節度のない行い、情欲、暴飲暴食、乱痴気騒ぎ、酒宴、そして[その他の]不法な偶像礼拝」のようなもの）に関して、確かに良い忠告です。というのも、神の最も明白な命令に対する、このような明らかに故意で、はなはだしい違反については、それが深刻な霊的問題を引き起こし、それに応じた厳しい神の懲らしめを招く危険性を、決して軽く見てはならないからです。

> あなたのしもべを、故意に犯す罪からも守ってください。そのような罪が私を支配することのないようにしてください。そうすれば、私は責められるところのない者となり、大きな罪を犯さずに済むでしょう。（詩篇 19 章 13 節 /NIV 訳）

祈りのために（7 節）：

> すべてのものの終わりが近づいている。それゆえ、思慮深く行動し、祈り[のため]に身を慎んでいなさい。（第一ペテロ 4 章 7 節）

ここで指摘しておく必要があるのは、ペテロが祈りを取り上げているのは、度を越した罪深い行いに関して自制することがなぜ重要なのかを示す、一つの例としてにすぎないということです。明らかに、私たちが 3 節に挙げられているような行い、すなわち「これらに類するすべてのこと」（ガラテヤ 5 章 21 節＜「そういった類のもの」−新解訳Ⅳ＞）に関わっているなら、それはクリスチャンとしての私たちの証し、霊的な平安（神からの懲らしめが厳しくなるため）、霊的な安全（そのような行いを放置すれば、死に至る罪や背教につながるため）、そして私たちに委ねられているどのような奉仕の働きにも、必ず悪影響を及ぼします。しかし、すべての信者は祈っている、あるいは祈るべきであるため、ペテロはこの例を用いて、思慮深く慎みのある歩みからそれることには、直ちに、しかも場合によっては深刻な結果が伴うことを思い起こさせているのです。いつでも祈りによって自分の心配事を直接主に申し上げることができなければ、私たちはどうなってしまうでしょうか。もし私たちが主との交わりから外れ、悔い改めて罪を告

白することを拒んでいるなら、自分の祈りが聞き入れられると期待してよいのでしょうか（ヨブ 35 章 12-13 節; 箴言 1 章 28-31 節, 15 章 8 節, 15 章 29 節; ヨハネ 9 章 31 節）。

もし私が心の中で罪を大切にしていたなら、主は私の祈りを聞き入れてくださらなかったであろう。（詩篇 66 章 18 節 /NIV 訳）

祈りが聞き入れられるのは、義なる者に与えられた特権です（たとえば、ヨハネ 9 章 31 節; ヤコブ 5 章 16-18 節）。そしてペテロにとって、神からの助けを受けるためのこの道を妨げのない状態に保つことは、極めて重要なことでした。なぜなら、私たちはペテロが神の御霊によって書いたことを知っているからです。

(7) 同じように、夫たちよ、[妻と]共に生活するときには、[聖書の]知識に従い（すなわち、妻をどのように正しく扱うべきかについて、聖書が言葉と模範によって教えていることに従い）、[女性として]より弱い者に対して[ふさわしい]態度で接しなさい。[夫であるあなたがたは]、[永遠の]命の恵みを共に受け継ぐ者として、[妻たちに][あらゆるふさわしい]敬意を払いなさい。それは、**あなたがたの祈りが妨げられないため**である（すなわち、この点における罪が祈りの妨げとならないためである）。（第一ペテロ 3 章 7 節）

したがって、ここで祈りに言及しているのは、思慮深く慎みをもって自制するようにという勧めを、祈りのことだけに限定するためではありません。むしろ、イエス・キリストに喜んでいただきたいと願うすべての信者にとって、そのような自制がどれほど重要であるかを説明するためなのです。主との関係は、この人生において最も重要なものです。そして私たちは、いつでも確信をもって、恥じることなく、自分の願いを主の御前に差し出せることを望むべきです。なぜなら、それは主との祝福された関係が持つ、数多くの素晴らしい特権の一つだからです。

それゆえ、私たちは大胆に恵みの御座に近づこうではないか。それは、あわれみを受け、必要な時に助けとなる恵みを見いだすためである。（ヘブル 4 章 16 節 /NKJV 訳）

愛を保ち続けなさい（8 節）：

何よりも、互いに対する愛をしっかりと保ち続けなさい。なぜなら、「愛は多くの罪を覆う」からである（箴言 10 章 12 節; ヤコブ 5 章 20 節参照）。（第一ペテロ

4 章 8 節）

もちろん、愛はクリスチャン生活における最も重要な**徳**です。

> (34)「わたしはあなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合わなければならない。(35) あなたがたが互いに愛し合うなら、それによって、すべての人はあなたがたがわたしの弟子であることを知るだろう。」（ヨハネ 13 章 34-35 節 /NIV 訳）

> しかし、[私たちの主が再臨される将来のその時まで]今なお残っているのは、信仰、希望、愛という、この三つの[主要な徳]である。そして、このうち最も偉大なものは愛である。（第一コリント 13 章 13 節）

> そして、[仕上げとして]これらすべてのものの上に、[霊的]成熟を一つに結び合わせる[徳]である愛を身に着けなさい。（コロサイ 3 章 14 節; エペソ 4 章 2-3 節参照）

最後に引用した聖句が示しているように、真に愛のうちを歩んでいる信者は、霊的に成熟しており、クリスチャンとしての他のすべての徳をも実践することができます。なぜなら、それらすべてを一つに結び合わせるのが愛だからです。

> (36)「先生、律法の中で最も重要な戒めはどれですか。」(37) イエスは答えられた。「『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』(38) これが第一の、最も重要な戒めである。(39) 第二の戒めもこれと同じように重要である。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』(40) 律法全体と預言者たちの教えは、この二つの戒めにかかっている。」（マタイ 22 章 36-40 節/NIV 訳）

私たちが神を愛するのは、「神がまず私たちを愛してくださったから」です（第一ヨハネ 4 章 19 節）。そして、私たちは神、すなわち御父と、私たちのために死んでくださった御父の愛する御子、私たちの主イエスを愛しているので、同じように主に属する兄弟姉妹をも愛するのです。イエス・キリストは、私たちのために死んでくださったのと同じように、私たちの兄弟姉妹のためにも死んでくださいました。ですから、私たちも、主が彼らと私たちのために示してくださったのと同じ、自己犠牲の態度を兄弟姉妹に対して持つべきなのです。

(10) 愛とは、私たちが神を愛したことではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪を贖ういけにえとして御子を遣わしてくださったことにある。(11) 愛する者たちよ、神がこのように私たちを愛してくださったのだから、私たちも互いに愛し合うべきである。(第一ヨハネ 4 章 10-11 節 /NIV 訳)

ギリシヤ語の agape(アガペー)の意味については、このシリーズの中で、ペテロがほとんど同じ表現(「互いにしっかりと愛し合いなさい」;第一ペテロ 1 章 22 節)を用いている箇所を扱った際に、すでに説明しました。[5] どちらの箇所でも「しっかりと」と訳されている言葉は、ギリシヤ語の ektenes(エクテネース)に由来し、語源的には「限界まで引き伸ばされた」という意味です。私たちは、十字架上で私たちの罪の代価を支払ってくださった主への愛にも、主がそのためにも死んでくださった兄弟姉妹への愛にも、限界を設けてはならないのです。また、愛にはしばしば感情が伴いますが、兄弟姉妹に対する真の愛が、私たちが実際に彼らのために行うこと(彼らのために祈ること、それぞれに与えられた霊的な賜物に従って彼らに仕えること)によって表されるのと同じように、神への愛も、私たちが神に従うことによって表されます。神は私たちを、霊的に成長し、主と共に歩む中で前進し、主が私たちにもたらされるどのような試練にも耐え抜き、そして御霊から与えられた賜物を正しく用いることを中心として、他の人々も同じように歩めるよう助けるために召してくださいました。これらのことに感情が伴うかどうかにかかわらず、実際に**行う**ことこそが愛の本質なのです。そして、どれほど強い感情を抱いていたとしても、それを実際に**行う**のでないのなら、それは聖書の教える アガペーagape ではなく、真の意味での「愛」ではないのです。

(46)「なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのか。(47) わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを実行する者がどのような人に似ているか、示そう。(48) その人は、家を建てるとき、深く掘り下げて岩の上に土台を据えた人に似ている。洪水が起こり、激流がその家に押し寄せたが、家はしっかりと建てられていたので、揺り動かすことができなかった。(49) しかし、わたしの言葉を聞いても実行しない者は、土台を据えずに地面の上に家を建てた人に似ている。激流がその家に押し寄せると、たちまち崩れ落ち、その家は完全に破壊されてしまった。」(ルカ 6 章 46-49 節 /NIV 訳)

---

[5] ペテロの手紙シリーズ #32:「霊的成長への勧め:第一ペテロ 1 章 21-25 節」

愛は多くの罪を覆う(8 節):

何よりも、互いに対する愛をしっかりと保ち続けなさい。なぜなら、「愛は多くの罪を覆う」からである(箴言 10 章 12 節; ヤコブ 5 章 20 節参照)。(第一ペテロ 4 章 8 節)

憎しみは争いを引き起こすが、愛はすべての罪を覆う。(箴言 10 章 12 節 /NKJV 訳)

(19) 私の兄弟たちよ、あなたがたのうちの誰かが真理から迷い出て、別の誰かがその人を[信仰に]立ち返らせたなら、(20) 罪人をその誤った道から立ち返らせる者は、その人の命を[死に至る罪による]死から救い、[それによって]多くの罪を覆うことになる(すなわち、その結果、死に至る罪に陥る代わりに、罪の赦しを受けることになる)と知りなさい。(ヤコブ 5 章 19-20 節)

真のクリスチャンとしての意味で、愛をもって接するよう努めるべき非常に重要な理由の一つは、愛が、私たちに与えられているものの中で、罪に対抗する最も強力な力だからです。罪はあくまでも罪であり、罪を取り除くことができるのはイエス・キリストだけです。そして主は、十字架上ですべての人間の罪のために死ぬことによって、実際にそれを成し遂げてくださいました(ヨハネ 1 章 29 節; ヘブル 9 章 28 節; 第一ヨハネ 2 章 2 節)。私たちは主を信じるとき、自分の罪からの贖いを受け(エペソ 1 章 7 節; コロサイ 1 章 14 節)、罪を告白するとき、その罪の赦しを受けます(詩篇 32 章 6 節; 第一ヨハネ 1 章 9 節, 2 章 1 節)。しかし、これらの聖句が教えているように、愛のうちを歩むことには、私たち自身の生活においても、また私たちが関わる人々の生活においても、罪の悪影響を和らげ、その広がりを抑える緩衝作用があります。そして、罪に捕らわれている人々に奉仕するとき、祈りや励まし、あるいは導きを通して私たちが差し伸べる助けが、神がその人を救い出し、「その命を死から救う」ために用いられる手段となるかもしれません。したがって、愛のうちを歩み、私たちの全存在をもって主を愛し、その愛を兄弟姉妹にも差し伸べることによって、私たちは自分自身を守るだけでなく、私たちが関わり、奉仕するクリスチャンの兄弟姉妹の霊的な安全にも貢献することができるのです。その結果、罪の悪影響が神のあわれみと赦しの中にのみ込まれ、消し去られることも少なくないのです。

ああ、神の知恵と知識の富は、何と深いことか! 神の裁きは何と計り知れず、その道は何と探り尽くしがたいことか!(ローマ 11 章 33 節 /NKJV 訳)

不平を言わずにもてなし合いなさい(9 節):

> 不平を言わずに、互いにもてなし合いなさい。(第一ペテロ 4 章 9 節)

この命令について最初に注目すべきことは、イエス・キリストと共に歩んでいる信者との関わりにおいては当てはまりますが、不信者や背教者に対しても同じように振る舞うことが求められているわけ**ではない**ということです。

> (9) この教えから離れていく者は、誰であれ、神との関係を持っていない。しかし、キリストの教えにとどまる者は、御父とも御子とも関係を持っている。(10) あなたがたの集まりに来る者が、キリストについての真理を教えないなら、その人を家に迎え入れてはならないし、どのような形でも励ましてはならない。(11) そのような人々を励ます者は、彼らの悪い働きに加担することになる。(第二ヨハネ 1 章 9-11 節 /NLT 訳)

第二に注目すべきことは、ここで「もてなす」と訳されている言葉は、ギリシヤ語では、英語の「ホスピタブル hospitable」という言葉ほど限定された意味を持っていないということです。英語でこの言葉を聞くと、私たちはすぐに、誰かを家に招いて食事を振る舞ったり、場合によっては一晩泊めてあげたりすることを思い浮かべます。もちろん、それもこの命令の実践の一つではありますが、この命令の主な趣旨は、御言葉の真理を分かち合う際に、他の人々を排除して、自分たちだけの閉鎖的な交わりにしてしまうことを避ける点にあります。私たちは御言葉を広めたいと願うべきであり、したがって、自分たちと同じようにすでに真理について深い教えを受ける祝福にあずかっている親しい仲間だけと付き合うのではなく、自分たちが知り、信じている真理を、他の人々にも親しみをもって伝えることに心を開いているべきなのです。御言葉を中心とした私たちの交わりは、どのような形で行われているにせよ、何か特別な秘密の会員制クラブのようなものと考えるべきではありません。御言葉を聞くために私たちや私たちの交わりのもとに来る人々が、居心地よく、歓迎されていると感じられるよう、無理なくできることを行うべきであり、その逆であってはなりません。もちろん、これは私たちの中には、時として負担に感じられる人もいるかもしれません。というのも、私たちの交わりにやって来るすべての人と、必ずしも自然に気が合うとは限らないからです。見知らぬ人と一定の距離を保つことには、もっともで正当な理由がある場合もあります。しかし、この聖句は、表面的な好き嫌いや偏見によって、主とその御言葉を第一にすることが妨げられてはならないと教えています。また、そうしなければならないことについて不平を言ってはならないとも教えています(むしろ、真理を分かち合えることを喜ぶべきなのです)。

賜物（10 節）：

> [私たち]一人ひとりが[それぞれの霊的な]賜物を受けているのだから、神の多様な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合おうではないか。（第一ペテロ 4 章 10 節）

教会時代においては、聖霊はすべての信者に、救われた時点で少なくとも一つの霊的な賜物を与えてくださいます（第一コリント 12 章 4-11 節）。[6] 霊的な賜物の目的は、イエス・キリストの教会を建て上げること、すなわち、他の信者たちの霊的成長、霊的前進、そして霊的な実を結ぶ働きに貢献することです。霊的な賜物は、基本的に二つの種類に分けることができます。一つは、教えることや伝道することなど、神の御言葉を伝えるための賜物であり、もう一つは、奉仕、励まし、施し、監督、慈善など、真理を伝える働きを支えるための賜物です。すべての賜物が重要であり、それらすべてが調和して共に働かなければ、キリストの体はその能力を十分に発揮することができません（第一コリント 12 章 12-31 節）。ですから、言うまでもなく、私たちは皆、ここでペテロが勧めていること、すなわち、与えられた賜物を育て、それを実際に用いることに努めるべきなのです。

> (11) キリストご自身が、ある人々を使徒に、ある人々を預言者に、ある人々を伝道者に、またある人々を牧師や教師に任命された。(12) それは、主に属するすべての聖徒たちが、それぞれ自分に与えられた奉仕の働きを行えるように整え、それによってキリストの体全体が建て上げられるためである。(13) そして、私たちすべてが、神の御子を信じ、御子を十分に知ることにおいて一致するという[目標]に到達し、一人ひとりが完全な者となるまで、すなわち、キリストの満ち満ちた豊かさにふさわしい成熟の水準に達するまでである。(14) それは、私たちがもはや未熟な者ではなくなり、人々の策略から生じる、教えと称するあらゆる風に吹き流され、進むべき道からそれて、なすがままに押し流されることのないためである。そのような人々は、欺きを巧妙に働かせるためなら、どのようなことでもしようとする。(15) むしろ、私たちは愛をもって真理を受け入れることにより、教会のかしらであるキリストを模範として、あらゆる面で成長していくためである。(16) このようにして、教会の体全体は、キリストがその一つひとつの部分に力強く備えてくださる筋や腱によって、キリストのうちにしっかりと組み合わされ、結び合わされて、愛のうちに自らを建て上げるために成長していくのである。（エペソ 4 章 11-16 節）

---

[6] 聖書の基礎第 5 部：聖霊論、II.3.d.1 項「霊的な賜物」を参照してください。

> というのも、この源である[イエス・キリスト]からこそ、体全体[すなわち教会]は、その[すべての]関節や腱を通して[真に]養われ、導かれ、[そのようにして]神が与えてくださる成長を遂げるからである。(コロサイ 2 章 19 節後半)

良い管理者として賜物を用いて仕える(10 節):

> [私たち]一人ひとりが[それぞれの霊的な]賜物を受けているのだから、神の多様な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合おうではないか。(第一ペテロ 4 章 10 節)

ここで「仕える」と訳されている動詞は、英語の「deacon(執事)」の語源となったギリシヤ語の名詞 diakonos と同じ語根から来ています。ギリシヤ語において、執事とは何よりもまず仕える者のことであり、私たちクリスチャンが行うべき奉仕とは、イエス・キリストの教会の益のために、自分に与えられた霊的な賜物を用いることです。具体的にどのようにそれを行うべきかについては、信者の数だけ、それぞれの賜物の種類や現れ方に違いがあり、ましてや賜物の組み合わせとなれば、さらに多様であるということを理解しておくことが重要です。私たちの中に、まったく同じ人は二人といません。したがって、主がその恵みと御霊の力によって、私たちに賜物を用いるよう召される方法も、非常に多様で、変化に富み、万華鏡のようにさまざまです。つまり、ペテロがここで述べているように、「多面的」なのです。

霊的に成長するにつれて、私たちは自分自身の才能や賜物が具体的にどの分野にあるのかを理解するようになります。そして、十分に成熟したならば、主が必ず私たちの前に備えてくださる奉仕の機会に対して、心を開き、それを進んで受け入れるべきです。霊的成長、霊的前進、そして霊的な実を結ぶ働きという三つの働きには、明確な進展の順序がある一方で、互いに重なり合う部分もありますが、賜物を用いることについても同じことが言えます。すべてのクリスチャンが、信仰生活の初期から行うことのできる、また行うべきことがいくつかあります。それは、自分の主な奉仕の分野が最終的にどこになるのか、まだ示されていない段階でも同じです。たとえば、霊的成熟の程度にかかわらず、私たちは皆、祈ることができますし、献げることも、他の人々を励ますこともできます。しかし、クリスチャン生活とは、できることを減らしていくのではなく、増やしていくものです。ですから、成長するにつれて、すべてのクリスチャンに共通する働きを続けながら、同時に、教会を建て上げるために自分に与えられた、独自の賜物や才能をそれぞれにふさわしい形で発展させていくことができるのです。

「管理者」と訳されている言葉は、ギリシヤ語の oikonomoi（オイコノモイ）で、「家」を意味する oikos（オイコス）と、ここでは「管理」という概念を持つ nomos（ノモス）から成っています。ギリシヤ・ローマ世界において、この役職は非常に重要なものでした。当時の家には通常、何世代にもわたる家族や多くの親族が暮らし、さらに多数の使用人（そのほとんどは奴隷でした）もいたからです。管理者は、小さな会社の最高経営責任者（CEO）や、レストランの総支配人のような役割を果たしていました。物資や備品の管理、人事、財務、日常業務全般など、ほとんどすべての事柄に責任を負っていたのです。優秀な管理者がいれば、理想的には家の主人はこうした事柄を何一つ心配する必要がありませんでした（ポテパルの家を模範的に管理したヨセフのことを思い起こすとよいでしょう。創世記 39 章 2-6 節）。

このたとえにおいて、主イエス・キリストが私たちの主人であり、その家が主の教会です。私たちは皆、この家の働きにおいて果たすべき役割を持っています。そして、それぞれが自分の役割をよりよく果たすほど、家全体の働きもより円滑になり、私たち自身にとっても益となります。なぜなら、私たちは自分の奉仕に応じて報いを受けるからです。私たちには皆、ある程度の訓練（霊的成長）が必要です。しかし、奉仕できるようになったらすぐに、私たちが尊敬する主人の家が円滑に機能するよう、自分には何ができるのかを熱心に探し求めるべきです。そうすることによって、この家に属するすべての人々の必要を満たすという、その目的を果たすことができるのです。

上のたとえを現代風に言い換えるなら、地域教会をレストランにたとえることができます。その第一の目的は、客に良い食事を提供することです。客を楽しませることでも、社交の場を提供することでも、客からお金を巻き上げることでもなく、良い栄養を与えることなのです。この仕事を成功させるためには、食料庫に食材を補充する人、売上金を管理する人、必要な物資を購入する人、建物を維持管理する人、床を掃除する人、皿を洗う人、テーブルを整える人、注文を受けて料理を運ぶ人、そして料理を作る人が必要です。こうした仕事の多くは、他の日常生活の場ですでに身につけた技能を生かせるため、専門的な訓練をほとんど受けなくても習得できます。しかし、優秀な料理長がいるかどうかが、レストランの成功を左右する重要な要因となることがよくあります。なぜなら、料理そのものがおいしくなければ、店の雰囲気やその他の付随的な要素で補えることには限界があるからです。このことは、神の御言葉を伝える牧師・教師には、専門的な訓練が必要であることを説明するのに役立ちます。生まれつき才能があり、「料理のセンスがある」人もいるでしょう。しかし、少なくとも長期間の見習い修業を経ずに、優れた料理人になることはめったにありません。

以上の比較も、ほかのすべてのとえと同じように、あまり細部まで当てはめることはできません。しかし、一つの点では確かに共通しています。それは、主の家には行うべき仕事がたくさんあり、神の御言葉の真理を広めるために協力できる機会も豊富にあると

いうことです。霊的に成熟した人々こそ、その働きを最もよく行うことができ、それによって、自分に与えられた霊的な賜物の目的を果たすことができるのです。どのような賜物を与えられているかにかかわらず、私たちには皆、この人生において永遠の報いを得るための等しい機会が与えられています。ただし、その報いは、それぞれがどのように働きを果たしたかによって決まります。

> 植える者と水を注ぐ者は、一つの[同じ]目的を持っており、それぞれが自分の労苦に応じて報いを受けるのである。(第一コリント 3 章 8 節 /NIV 訳; 参照: ガラテヤ 6 章 9 節; ヘブル 10 章 35 節; 第二ヨハネ 1 章 8 節)

御言葉を伝えることと奉仕すること(11 節):

> 御言葉を伝える者がいるなら、神から直接与えられた言葉を語るかのように語りなさい。奉仕する者がいるなら、神が与えてくださる力によって奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神がほめたたえられるためである。栄光と力は、世々限りなくキリストのものである。アーメン。(第一ペテロ 4 章 11 節)

前述したように、御言葉を伝えることと奉仕することは、霊的な賜物の二つの基本的な分野です。ここでペテロは、個々の賜物の名前を挙げることなく、この二つの大きな分類を示しています。それによって、どちらの種類の賜物についても、その目的が真理を広めることであるという点が明確になっています。パウロが説明しているように(第一コリント 12 章 12-31 節)、キリストの体は多くの部分から成り立っており、そのすべてが体全体の正常な働きにとって重要です。奉仕による支えがなければ真理を伝えることはできず、また、真理を伝えることがなければ、奉仕にも霊的な意味はありません。これが霊的な賜物に関する聖書の基本原則です。しかし、ラオデキヤの時代においては、真理がほとんど、あるいはまったく伝えられない一方で、明確な目的のない奉仕ばかりが盛んに行われているのが一般的です。

> 次のことを指示するにあたって、私はあなたがたをほめることができない。あなたがたの集まりは、益になるどころか、かえって害をもたらしているからである。(第一コリント 11 章 17 節 /NIV 訳)

しかし、今取り上げている聖句において、ペテロが主として強調しているのは、私たちが賜物を用いる際の正しい姿勢です。伝道する人、聖書を教える人、その他の形で神の御言葉を伝える人は、「神から直接与えられた言葉を語るかのように」語らなけれ

ばなりません。つまり、真理を伝えるすべての人は、自分の奉仕に極めて真剣に取り組み、私たちが本来すべきように聖書の真理を忠実に伝えているならば、それはまさしく神の言葉なのだという事実を、決して見失ってはならないということです。このことから、教師、伝道者、護教者、その他御言葉を伝えるすべての人にとって、その奉仕に伴う危険の一つは、次第に真剣さを欠き、自己中心的な姿勢に陥って、自分自身や、自分の話がどのように受け止められるかに関心を向けるようになることだと分かります。この種の奉仕には、人気を得たい、好意的に受け入れられたい、聞いている人々の感情を揺り動かしたい、語る内容そのものではなく、話し方や発表の仕方によって高く評価されたい……という大きな誘惑があります。言い換えれば、御言葉を伝える人が自分の目的を忘れ、代わりに自己顕示欲に屈してしまうと、真理を教えることが、単に人々の心を動かすための「説教」に取って代わられがちなのです。しかし、これは主と主の真理に関わることであって、私たち自身に関わることではありません。もし私たちが自分自身を中心に据えるなら、真理は脇に追いやられ、イエス・キリストのためには、ほとんど、あるいはまったく何も成し遂げられないでしょう。それとは反対に、真理を分かち合う私たちの目的は、ひたすら「*すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して**神がほめたたえられるためである。栄光と力は、世々限りなくキリストのものである。アーメン***」というものであるべきなのです。

同様に、直接御言葉を伝える務めではなく、御言葉が伝えられ、人々に受け入れられることを支えるための賜物を与えられて奉仕する人々も、自分たちの奉仕に力を与えてくださるのは神であるということを、しっかりと心に留めておく必要があります。というのも、奉仕に携わる人々にとって、その働きに伴う危険は、自分自身の貢献を過大評価し、その結果、神からではなく人からの称賛を求めるようになることだからです。このような考え方の罠に陥る人々は、同じように世俗的な成功や派手な演出ばかりを重視する「伝道の働き」に引き寄せられる傾向があります。そこでは、人数や名声、資金がすべてを支配し、その結果、神の御言葉が広まるのを実際に支えるどころか、真理から人々の注意をそらす、無意味な活動を助長することになってしまいます。しかし、奉仕するよう召された人々が、「*すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して**神がほめたたえられるためである。栄光と力は、世々限りなくキリストのものである。アーメン***」ということを何よりも大切にするならば、自己顕示欲によって、実際に神の御心を成し遂げている働きを謙虚に支えることが妨げられることはないでしょう。たとえ、そのような真に神に喜ばれる働きが、この世ではほとんど称賛されないとしてもです。

> **主よ、私たちにではなく、私たちにではなく、あなたの御名にこそ栄光がありますように。あなたの愛と真実のゆえに。**（詩篇 115 篇 1 節 /NIV 訳）

私たちが自分の人生に対する神の目的を果たし、主イエス・キリストが私たちに与え

たいと願っておられる報いを得ようとするならば、ここでペテロが示している正しい考え方をもって霊的な賜物を用いることが、絶対に欠かせません。私たちは、自分自身ではなく主イエス・キリストに仕えているのだということを常に心に留め、「規則に従って競技する」必要があるのです（コロサイ 3 章 23-24 節）。

(24) 競技場で走る者は皆走るが、賞を受けるのはただ一人であることを知らないのか。あなたがたも、目指している賞を得られるように走りなさい。(25) また、競技に参加する者は皆、あらゆる面で自制する。彼らがそのようにするのは、朽ちる勝利の冠を受けるためである。しかし、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのである。（第一コリント 9 章 24-25 節）

(4) 兵士として仕える者は、日常生活の事柄に巻き込まれず、自分を兵士として召した指揮官を喜ばせようとする。(5) 同じように、競技者も、規則に従って競技しなければ、勝利の冠を受けることはできない。(6) 労苦して働く農夫こそ、収穫の分け前を最初に受けるべきである。(7) 私の言っていることをよく考えなさい。主が、これらすべてのことについて理解を与えてくださるからである。（第二テモテ 2 章 4-7 節 /NIV 訳）

第三段落（12-19 節）

(12) 愛する者たちよ、あなたがたを試すために降りかかっている火のような試練に、何か異常なことが起こっているかのように驚き、動揺してはならない。(13) しかし、あなたがたが[真に]キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、あなたがたが大いに喜び、歓喜するためである。(14) もしあなたがたがキリストの御名のゆえに[実際に]非難されているなら、あなたがたは[真に]幸いである。なぜなら、栄光と力の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまっておられるからである（すなわち、試練の中であなたがたを支えるためである）。(15) あなたがたのうち、殺人者、盗人、悪事を働く者、あるいは他人のことに干渉する者として苦しむ者がいてはならない。(16) しかし、[誰かが]「クレスティアノス（クリスチャン）」と呼ばれることによって[苦しみを受ける]なら、それを恥じてはならない。むしろ、その名のゆえに神に栄光を帰しなさい。(17) なぜなら、神の家から始まって、裁きが行われる時が来ているからである。そして、もし裁きがまず私たちから始まる

のであれば、神の福音を信じない者たちの結末はどうなるのか。(18) [次のように書かれているとおりである。]「正しい者がかろうじて救われるのであれば、神を敬わない者や罪人はどうなるのか」(箴言 11 章 31 節)。(19) それゆえ、神の御心に従って苦しんでいる者たちは、善を行い続けながら、自分の命を真実な創造主に委ねなさい。(第一ペテロ 4 章 12-19 節)

驚き、動揺してはならない(12 節):

愛する者たちよ、あなたがたを試すために降りかかっている火のような試練に、何か異常なことが起こっているかのように驚き、動揺してはならない。(第一ペテロ 4 章 12 節)

ここで「驚き、動揺する」と訳されている言葉は、「異質であること」に関係するギリシヤ語の語根 xen-(ゼン)から来ており(xenophobia[外国人嫌悪]参照)、文字どおりには「奇妙なことだと思う」という意味です(多くの翻訳ではそのように訳されています)。しかし、ここでペテロが述べているのは、予期しない出来事によって生じる衝撃や驚愕、あるいは驚きのことです。経験豊富な歴戦の兵士でさえ、まったく予想していなかった衝撃に襲われると、恐慌状態に陥ることがあります。これこそ、成熟したクリスチャンがまず避けることを学ばなければならないことです。すなわち、思いがけず試練が降りかかったときに、最初の反応として恐慌状態に陥ったり、怒りを爆発させたりすることです。というのも、恐ろしい知らせを聞いたときの、あまりにも自然な最初の感情的反応、その最初の衝撃さえ耐え抜くことができれば、御霊の助けによって、内に蓄えられた霊的な力を奮い起こし、この新たな苦難の海を安全に通り抜ける道を主が備えてくださると信頼できるようになることが多いからです。

(1) アハブは、エリヤが行ったすべてのこと、また彼がすべての預言者たちを剣で殺したことを、イゼベルに告げた。(2) するとイゼベルは使者をエリヤのもとに遣わして言わせた。「明日の今ごろまでに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命と同じようにしなければ、神々が私を幾重にも罰するように。」(3) これを見たエリヤは立ち上がり、**自分の命を守るために逃げた**……。(列王記上 19 章 1-3 節前半 /NKJV 訳)

もしエリヤが一日その場にとどまり、この問題を祈りのうちに主に委ねていたなら、それでもなお「自分の命を守るために逃げた」だろうと、本気で考える人がいるでしょうか。しかし、ひとたび恐慌や動揺に心を支配されてしまうと、そこから立ち直ることはそれだけ難しくなります。悪魔は反撃の達人です。反撃がしばしば成功するのは、先ほ

どのエリヤの場合と同じように、通常、敵が最も無防備な状態にあるときを狙うからです。つまり、反撃が成功しやすいのは、相手が攻撃を終えたばかりで態勢を立て直しておらず、しかも自分の攻撃が成功したことで油断しているときだからです。そのようなときに素早く反撃されると、それまでの自信は簡単に打ち砕かれてしまうのです。霊的な面でも同じことが言えます。

> あなたがたは、よく走っていた。それなのに、誰があなたがたの行く手を遮り、真理に従うことを妨げたのか。（ガラテヤ 5 章 7 節 /NIV 訳）

したがって、すべての信者が試練、特に困難で長く続く試練に対処する方法を身につける必要があることは確かですが、どのような試練に合格するためにも、まず重要なのは、最初から過剰に反応し、神に信頼しないという過ちを避けることです。昔からの言い回しに、「今は慌てるな！ 慌てる時間なら後でいくらでもある」というものがあります。つまり、私たちは**常に**警戒を怠らないという霊的な習慣を身につける必要があるのです。この地上は、すべて敵の領域です。今は穏やかで平和かもしれませんが、私たちの「敵である悪魔は、ほえたける獅子のように、食い尽くすべき者を探し求めて歩き回っている」のです（第一ペテロ 5 章 8 節 /NIV 訳）。悪魔とその手下たちは、私たちを攻撃する好機を常にうかがっていると考えて間違いありません。そして、私たちが最も予期していないときこそ、通常、彼らにとって絶好の攻撃の機会なのです。

> (6) 確かに、その人は決して揺るがされることがない。正しい者は永遠に覚えられる。(7) その人は悪い知らせを恐れない。その心は堅く定まり、主に信頼している。(8) その心は揺るがず、恐れることがない。ついには、自分の敵に対する勝利を見ることになる。（詩篇 112 篇 6-8 節 /NIV1985 訳）

これは真実です。しかし、主に確信をもって信頼することと、油断することは同じではありません。主が求めておられることを行い、主のために成長し、前進し、実を結んでいる信者は、予期しない災難を恐れて、絶えず後ろを振り返ったり、びくびくしながら歩いたりする必要はありません。私たちはクリスチャンとして歩む中で、「獅子のように大胆」であってよいのです（箴言 28 章 1 節）。なぜなら、私たちは、主が私たちを見守ってくださっており、実際に私たちに代わってこれらの戦いを戦ってくださっているのは主ご自身であると知っているからです。しかし同時に、ここが悪魔の支配する領域であり、私たちはその中に入り込んでいる者であることも、心に留めておかなければなりません。[7] イエス・キリストに従う者として、特に救い主をあがめ、自分の人生に対する神

---

[7] 特に、SR 4「サタンの世界体制」第 I 節「悪魔の領域にいる寄留者たち」<リンク先ファイルの 4 頁

のご計画を真に果たしているならば、私たちはサタンとその配下の者たちにとって格好の標的となります。そして、遅かれ早かれ、抵抗や敵対に直面することになるのです。

ですから、試みや試練、困難や苦難が私たちに降りかかっても、それを「奇妙なことだと思う」べきではありません。この一時的な人生という戦場にいる信者にとって、それは「通常の状態」なのです。しばらくの間、苦難から解放されて平穏な時期が与えられたからといって、霊的に気を緩めてよい人は一人もいません。物事が順調に進んでいるなら、それは主を賛美し、感謝すべき理由です（ヤコブ 5 章 13 節後半）。また、与えられているものを失うのではないかと心配するのも適切ではありません（箴言 10 章 22 節）。しかし、試練は遅かれ早かれやって来ます。そして、そのときには、すぐに冷静さを失うのではなく、攻撃にさらされている最中にも、神に信頼する者にふさわしい落ち着きと冷静な判断力を保つことを、あらかじめ心に決めておく必要があります。これは、困難が生じたまさにその初期の段階で、特に重要なことです。

> 「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためである。あなたがたはこの世で苦難に遭う。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」（ヨハネ 16 章 33 節 /NIV 訳）

人間には、最悪の事態を想像し、いったんそれが起こり始めたように見えると、本当に最悪の結果になるのではないかと恐れ、さらに、迫り来る災難を防ぐ方法はなく、その後にも安らぎや救い出される望みはないのではないかと恐れる傾向があります。これは古い罪の性質から来る傾向です。しかし、これまでの人生で、主は何度私たちを救い出してくださったでしょうか。自分自身に正直になって振り返れば、主が、私たちの記憶に収まりきらないほど何度も、あらゆる種類の困難から救い出してくださったことを思い起こすでしょう。それも、自分ではどうすることもできなかったときに救い出してくださったことが、少なくないはずです。そして主は、私たちのすべての罪のために十字架で死ぬことによって、私たち全員を火の池から救い出してくださいました。私たちにはまったく対処する力のなかったその問題を解決するために、主は、私たちが一生かけて想像しても到底思い及ばないほどの犠牲を払ってくださったのです。そこまでしてくださった主が、今や主に属する者となった私たちを、現在直面している比較的小さな困難からも、必ず救い出してくださるということが分からないでしょうか。

> (31) それでは、これらのことについて何と言えばよいのか。神が私たちの味方であるなら、誰が私たちに敵対できようか。(32) ご自分の御子さえ惜しまず、私たちのために引き渡してくださった方が、どうして御子と共に、[私たちに必

-/A4 版印刷本「サタンの反乱」の 175 頁-を参照下さい＞を参照してください。

> 要な]すべてのものをも恵みによって与えてくださらないことがあろうか。(ローマ 8 章 31-32 節)

ですから、困難が訪れ、災難が迫っているように見えるとき、私たちは決して慌ててはなりません。むしろ、しっかりと立ち、主に信頼する必要があります。主が私たちを愛し、私たちの味方でいてくださることを完全に信じて、直ちにその問題を祈りのうちに主に委ねるべきです。また、過去に主が私たちを救い出してくださった数多くの出来事を思い起こす必要があります。希望がまったくないように思えたときにも、主こそが私たちの希望であり、助けであったのです。主は決して、絶対に私たちを失望させることはありません。なぜなら、主は完全に、そして絶対的に真実な方だからです。

> (1) 神は私たちの避け所、また力。[神は]苦難の[時の]私たちの助けであり、[助けを求めれば]すぐに見いだされる方である。(2) それゆえ、たとえ地が揺らぎ、山々が海のただ中で震えても、私たちは恐れない。(3) [たとえ]その水がとどろき、泡立ち、その荒波によって山々が揺れ動いても。(詩篇 46 篇 1-3 節)

火のような試練(12 節):

> 愛する者たちよ、あなたがたを試すために降りかかっている火のような試練に、何か異常なことが起こっているかのように驚き、動揺してはならない。(第一ペテロ 4 章 12 節)

試練全般、特に自分の過ちによらない苦難にはさまざまな形があり、主と親しく歩んでいるクリスチャンの人生において、それらがまったくないということはめったにありません。しかし、時には、まさに「火による試練」と呼ぶべきものに直面することがあります。つまり、比較的小さな不便や困難と、信仰を大きく試す厳しい試練とは、区別して考えるべきだということです。イゼベルの脅迫に対するエリヤの反応が適切でなかったと指摘するのはもっともですが、国の実質的な支配者から命を脅かされることは、決して小さな問題ではありませんでした。しかも、その支配者は、過去にも同じような脅迫を何度も実行に移し、ためらうことも情けをかけることもなく、速やかに人々を殺してきた邪悪な人物だったのです。また、エリヤが歴史上最も偉大で、最も信仰の強い人々の一人であったことも考慮すべきです。そのようなエリヤでさえ、突然の衝撃によってつまずいたのですから、私たち自身も同じような過ちを犯す可能性があることを、謙虚に認めなければなりません。そもそも、この出来事が聖書に記録されているのは、まさに私たちが同じ過ちを犯さないためなのです。特に厳しい試練、すなわち、並外れた災難が突然降りかかってきたときには、速やかに状況を把握し、直ちに霊的な足場をしっかり

と固めることが何よりも重要です。災難に見舞われたとき、イエス・キリストに属する者として、また、自分の目に見えるもの、耳に聞こえるもの、あるいは自分が感じることよりも、主ご自身と、主が私たちに与えてくださった約束を信頼する者として、私たちは次のようにする必要があります……。

1) 予期しない試練が降りかかったときには、深呼吸をして、**決して慌てない**ことです（何らかの理由で霊的な警戒を緩め、そのために不意を突かれた場合には、この第一の段階がいっそう重要になります）。

「苦難の日にわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを救い出す。そうすれば、あなたはわたしをあがめるであろう。」（詩篇 50 篇 15 節 /NIV 訳）

(14) 主は言われる。「彼がわたしを愛しているので、わたしは彼を救い出す。彼がわたしの名を認めているので、わたしは彼を守る。(15) 彼がわたしを呼び求めるとき、わたしは彼に答える。苦難の中で、わたしは彼と共にいる。わたしは彼を救い出し、彼に誉れを与える。(16) わたしは彼を長い命で満ち足らせ、わたしの救いを彼に示す。」（詩篇 91 篇 14-16 節 /NIV 訳）

(23) それでも、私はいつもあなたと共にいます。あなたは私の右の手を握ってくださいます。(24) あなたは御自身の助言によって私を導き、その後、私を栄光のうちに迎え入れてくださいます。(25) 天において、あなたのほかに誰が私にいるでしょうか。地上においても、あなたのほかに私が望むものは何もありません。(26) 私の肉体も心も衰えることがあるでしょう。しかし、神は私の心の力、永遠に私の受ける分です。（詩篇 73 篇 23-26 節 /NIV 訳）

主は私をあらゆる悪の攻撃から救い出し、御自身の天の御国へと無事に導き入れてくださる。主に世々限りなく栄光があるように。アーメン。（第二テモテ 4 章 18 節 /NIV 訳）

2) 自分が試練に遭っていることを認識し、**恐れを退けること**です。

(3) 私が恐れるとき、私はあなたに信頼します。(4) 私は神にあって、その御言葉をほめたたえます。私は神に信頼し、恐れません。死すべき人間が、私に何をすることができるでしょうか。（詩篇 56 篇 3-4 節 NIV1985）

3) 主が私たちと共におられるのですから、主に信頼するなら、災難を**乗り越え**、試練

に合格することは、可能であるばかりでなく、**確実である**ことを思い起こすことです。なぜなら、主はそのように約束してくださっており、私たちを最後まで支え、試練を乗り越えさせるために必要な力を、すべて備えておられるからです。

あなたがたは、人間が普通に経験する範囲を超える試練に遭ったことはない。神は真実な方である。神は、あなたがたの耐えられる限度を超えて試されることを許さず、試練と共に逃れる道も備えてくださる。それは、あなたがたがその試練に耐え抜くことができるためである。(第一コリント 10 章 13 節)

4) 主に頼ることによって、**試練に合格する**と決意することです。

ただ神だけが私の岩、私の救い。神は私の砦。私は決して揺るがされない。(詩篇 62 篇 6 節 /NKJV 訳)

5) そして、そのようにして初めて、主が私たちに与えてくださった資源、力、知恵を用いて、な**すべきことを行う**のです。その際、自分自身の力ではなく、私たちを救い出してくださる**主に信頼する**のです。

「ここに集まっているすべての者は、**主が**剣や槍によって救われるのではないことを知るであろう。なぜなら、この**戦いは主のもの**だからである。主はあなたがたを皆、私たちの手に渡される。」(第一サムエル 17 章 47 節 /NIV 訳)

6) そして最後に、たとえ最悪の事態が起こったとしても、神は**すべてのことを働かせて、私たちの永遠の益となるよう**にしてくださっていることを、決して忘れてはなりません(ローマ 8 章 28 節)。

主の聖徒たちの死は、主の目に尊い。(詩篇 116 篇 15 節 /NASB 訳)

この方こそ、世々限りなく私たちの神である。神は死に至るまで、私たちを導いてくださる。(詩篇 48 篇 14 節)

(1) 正しい者が滅びても、誰もそれを心に留めない。神を敬う人々が取り去られても、誰も、正しい者が災いから守られるために取り去られるのだということを理解しない。(2) 正しく歩む者は平安に入り、死の中で横たわり、安息を得る。(イザヤ 57 章 1-2 節 /NIV 訳)

(21) 私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。(22) もし肉体にあって生き続けるなら、それは私にとって実を結ぶ働きをすることになる。しかし、どちらを選ぶべきか、私には分からない。(23) 私はこの二つの間で板挟みになっている。私が願っているのは、この世を去ってキリストと共にいることであり、その方がはるかに良いからである。(ピリピ 1 章 21-23 節 /NIV 訳)

試練はクリスチャン生活において避けられないものです。なぜなら、遅かれ早かれ、すべての信者は何らかの形で、悪魔とその目に見えない勢力から敵対を受けることになるからです。しかし、試練は同時に、非常に必要なものでもあります。試練なしに霊的成長はありません。試練がなければ、どうして私たちは自分の信仰を実証できるでしょうか。何らかの敵対や困難に直面する機会が与えられなければ、私たちが実際に、ほかの何ものや誰よりも主を**信頼している**ことを、どうして示せるでしょうか。アブラハムにとって、イサクを山に連れて行き、祭壇に縛りつけ、いけにえとして献げる準備をすることは、決して容易ではなかったはずです。しかし、信者がこれまでに直面した中でも最も厳しい試練の一つであったその試練は、アブラハムに永遠の栄光をもたらしました。彼がその試練に**合格した**からです。

(11) しかし、主の使いが天から彼に呼びかけた。「アブラハム、アブラハム。」彼は答えた。「はい、ここにおります。」(12) 御使いは言った。「その子に手をかけてはならない。その子に何もしてはならない。今、あなたが神を恐れていることが分かった。あなたは自分の子、自分のひとり子さえ、わたしに惜しまなかったからである。」(創世記 22 章 11-12 節 /NIV 訳)

(21) 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、その行いによって義と認められたのではなかったか。(22) あなたにも分かるように、彼の信仰と行いは共に働き、その行いによって信仰が完成されたのである。(23) こうして、「アブラハムは神を信じ、それが彼の義と認められた」という聖書の言葉が成就し、彼は神の友と呼ばれたのである。(ヤコブ 2 章 21-23 節 /NIV 訳)

(17) 信仰によって、アブラハムは神に試されたとき、イサクをいけにえとして献げた。約束を受け入れていた彼は、自分のひとり子を献げようとしたのである。(18) それは、神がアブラハムに「あなたの子孫はイサクを通して数えられる」と約束しておられたにもかかわらず、彼はそのイサクを献げようとしたのである。(19) アブラハムは、神には死者をよみがえらせることさえできると考えた。それゆえ、ある意味で、彼はイサクを死から取り戻したのである。(ヘブル 11 章

17-19 節 /NIV 訳）

アブラハムは明らかに、「何があっても」主に信頼していました。私たちの誰も、アブラハムと同じ程度の、あるいは同じような形の試練を受けることはないでしょう。しかし、だからといって、**私たちが**非常に厳しい試練に直面しないということではありません。私たちもアブラハムの足跡に従い、「何があっても」主が共にいてくださり、私たちを顧み、救い出してくださることを、積極的に信頼しようと、今から心に決めておきましょう。「これは試練なのだ」と認識し、主ご自身が、その数多くの憐れみに満ちた約束に従って、「何があっても」必ず私たちを無事に乗り越えさせてくださることを確信しましょう。

> あなたがたの兄弟であり、イエスにあって**苦難**と**御国**と**忍耐**を共にしている私ヨハネは、神の言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた。（黙示録 1 章 9 節）

人生、すなわちクリスチャンとしての人生そのものが、試練**なのです**。この地上では苦しみや苦難がありますが、その先には、私たちが熱心に待ち望んでいる神の御国があります。主が再臨されるとき、すべては至福に満ちたものとなります。私たちは、二度と死ぬことも、痛みや不快を感じることもない復活の体を受けます。先に世を去った愛する人々と再会し、すべての者がイエス・キリストにあって一つとなります。そして、この世でイエス・キリストのために耐え忍んできたすべての苦しみに対して、豊かな報いを受けるのです。私たちは新しいエルサレムで、主と御父、そして教会と共に永遠に生き、そこで受け継ぐ嗣業と報いを、永遠にわたって享受することになります。

現在の苦難と将来の喜びとの間には、先に引用した黙示録 1 章 9 節にあるように、**忍耐**があります。この忍耐こそが、私たちが今耐えている苦しみと、来たるべき栄光の将来に受けることを望んでいる永遠の祝福とを結びつけるものです。したがって、現在の苦難から将来の祝福へと至るクリスチャンの歩みにおいて、忍耐は不可欠な要素なのです。イエス・キリストへの信仰を保ち続けることができない人は、誰も現在の苦難を経て将来の祝福に至ることはできません。たとえ艱難期の大迫害において殉教に直面することが神の御心であったとしても、何があっても主への信仰を堅く保とうと決意しているのであれば、それまでの間に遭遇する大小さまざまな試練に対しても、忍耐強く立ち向かうべきではないでしょうか。実際、今、小さな試練に合格し、時折訪れる大きな試練にも合格することは、私たちの霊的成長に役立ち、将来の報いを積み上げるだけではありません。そのようにして霊的な粘り強さを養っておくことは、もし反キリストとその一味が私たちに加える最も厳しい攻撃に直面することになった場合、非常に大きな助けとなるでしょう。こうしてあらかじめ試練によって鍛えられていたことが、実は不可欠だ

ったと分かることさえあるかもしれません。

キリストの苦しみにあずかることを喜ぶ(13 節):

> しかし、あなたがたが[真に]キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜びなさい。それは、キリストが栄光のうちに現れられるときにも、あなたがたが大いに喜び、歓喜するためである。(第一ペテロ 4 章 13 節)

言うまでもなく、クリスチャンが何らかの悪行に対する神の懲らしめによって苦しんでいるのであれば、それは「キリストの苦しみにあずかること」ではありません(第一ペテロ 3 章 17 節; 4 章 15 節参照)。

> どのような懲らしめ(すなわち、神による訓練)も、それを受けている間は喜ばしいものではなく、むしろ悲しいものである。しかし、後になって、その懲らしめによって訓練された者たちには実を結ばせる。それは、平安(すなわち、神との関係において健全さと完全さが回復されること)に結びつく[個人的な]義の実である。(ヘブル 12 章 11 節)

しかし、上の聖句が保証しているように、私たちが悔い改めて罪を告白するなら、神の懲らしめによる苦しみでさえ、有益な結果をもたらします。一方、懲らしめのためではなく、まさにイエスに属し、主と親しく歩んでいるために、目に見える悪魔の手下たちや目に見えない勢力から敵対を受け、その結果として苦しんでいる人々にとって、その苦しみはあらゆる点で名誉なことであり、恥じたり悔やんだりする理由にはまったくなりません。実際、私たち信者は、主の苦しみにあずかるように特に召されているのです。つまり、私たちの主が栄光のうちに昇天された今、私たちが神のご計画の新たな焦点となり、悪魔の敵対の主要な標的となる中で、主の証人となるよう召されているのです。同時に、選ばれた御使いたちも、私たちの戦いを見守り、私たちに関心を寄せています(マタイ 18 章 10 節; ルカ 15 章 10 節; 第一コリント 11 章 10 節; ヘブル 1 章 14 節; 第一ペテロ 1 章 12 節)。

> 私は、神が私たち使徒を、死刑を宣告された者のように、人々の中で最も卑しい者として見せておられるのだと思う。というのも、私たちは御使いたちにも人間たちにも、全世界の見せ物のような存在となっているからである。(第一コリント 4 章 9 節)

パウロに非常に際立った形で当てはまったことは、私たちがキリストと共に歩んでいるなら、ほかの信者である私たちにも当てはまります。私たちは、主のために苦しむよう求められるとき、御使いたちと人間の双方に対して証しをすることになります。そして、不平を言わずに神に栄光を帰し、勇気と気高さをもってその苦しみに耐えれば耐えるほど、その証しはいっそう力強いものとなるのです。

(24)「弟子はその教師にまさるものではなく、しもべもその主人にまさるものではない。(25) 弟子はその教師のようになり、しもべはその主人のようになれば、それで十分である。人々が家の主人をベルゼブルと呼んだのであれば、その家の者たちはなおさらそのように呼ばれるであろう。」(マタイ 10 章 24-25 節 /NKJV 訳)

(20)「わたしがあなたがたに言った言葉を覚えていなさい。『しもべはその主人にまさるものではない。』人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するであろう。彼らがわたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉も守るであろう。(21) しかし、彼らはわたしの名のゆえに、これらすべてのことをあなたがたにするのである。それは、彼らがわたしを遣わされた方を知らないからである。」(ヨハネ 15 章 20-21 節 /NKJV 訳)

敬虔なクリスチャン生活を送りたいと願う人は皆、「迫害を受ける」のです(第二テモテ 3 章 12 節)。そして、上の聖句は、その理由を明確に示しています。私たち信者はイエス・キリストに属しており、主のしもべとして、主が再臨されるまで悪魔の敵対の標的となるからです。主が地上で私たちと共におられたときには、その敵対は主に向けられていました。しかし、主が第三の天に昇られた今、悪魔とその勢力が注意を集中させているのは、私たちなのです。それでも、この「主の苦しみにあずかること」は、絶望する理由ではなく、むしろ喜ぶ理由となるべきなのです。

(12) 愛する者たちよ、あなたがたを試すために降りかかっている火のような試練に、何か異常なことが起こっているかのように驚き、動揺してはならない。(13) しかし、あなたがたが[真に]キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜びなさい……。(第一ペテロ 4 章 12-13 節前半)

私たちが喜ぶべきなのは、今耐えているこの苦しみが、**イエス・キリストのため**の苦しみだからです。私たちがこのような苦しみを受けているのは、主が私たちに望んでおられることを行っているからです。したがって、敬虔なクリスチャンとしての歩みを忍耐強く続けているという、まさにその理由によって、目に見えるサタンの手下たちや目に見

えない勢力から圧迫や敵対を受けること、すなわち、真に「キリストの苦しみにあずかること」は、実際には、私たちがイエスの望んでおられることを行っているという**証拠**なのです。直感に反するように思えるかもしれませんが、私たちが見て分かるような問題もなく「快適な生活」を送っている信者が、敵対や圧迫、試練や苦しみを受けていないのは、まさにその人たちが、私たちのように敵から攻撃する価値のある標的とは見なされていないから、という場合が少なくありません。もちろん、それは私たちがイエス・キリストのために成長し、前進し、実を結んでいる一方で、その人たちはそうしていない場合のことです。

> (2) 兄弟たちよ、さまざまな試練に遭うときには、努めて**喜びなさい。**(3) なぜなら、信仰が試されることによって忍耐が生み出されると、心に留めておくべきだからである。(4) そして、その忍耐を十分に働かせなさい。それは、あなたがたがあらゆる点で欠けるところのない、十分に成熟した者となり、**完全な報い**を受けるにふさわしい者となるためである。(ヤコブ 1 章 2-4 節)

上の箇所の最初の節を引用する人々は、その後に続く部分まで読み進めないことがよくあります。それは残念なことです。なぜなら、3 節と 4 節が 2 節の意味を説明しているからです。なぜ人は、試練に遭っているときに「喜ぶ」のでしょうか。なぜ苦しんでいることを喜ばなければならないのでしょうか。ヤコブは、そのようなことを言っているのでは決してありません。ヤコブが言っているのは、私たちが受けている困難や痛み、苦しみにもかかわらず、喜ぶべきだということです。なぜなら、私たちは目の前の苦しみだけでなく、より大きな全体像を見据えているからです。では、その大きな全体像とは何でしょうか。それは、試練に正しく対処することが霊的成長につながり、その成長が、やがて豊かな永遠の報いをもたらすということです(マタイ 4 章 12 節, 5 章 3-12 節; ルカ 6 章 20-23 節参照。また、使徒行伝 5 章 41 節; コロサイ 1 章 24 節参照)。

> 信仰がなければ、[神に]喜ばれることはできない。神に近づこうとする者は、神が存在されること、そして熱心に神を求める者たちに報いてくださる方であることを信じなければならないからである。(ヘブル 11 章 6 節)

私たちは別の箇所で、冠とクリスチャンの報いについての教理を詳しく論じています。[8] 上の聖句は、キリストの裁きの座である ベーマ(bema)において、愛する主イエスから良い評価をいただくことを期待し、それを励みとして歩むことは、信者にとって正

---

[8] 特に、「来たる艱難期第 6 部」.I.7.「教会の裁きと報い」<リンク先ファイルの 42 頁-/A4 印刷本「来たる艱難期第六部」のを参照下さい>を参照してください。

当であり、実際に必要なことでもあると確証しています。

(10) なぜなら、私たちは皆、キリストの裁きの座(ベーマ)の前に立たなければならないからである。それは、各自がこの体を通して行ったことに応じて、それが良いことであれ、価値のないことであれ、その報いを受けるためである。(第二コリント 5 章 10 節)

この世で起こるすべてのことは、神のご計画との関係においてのみ意味を持つと知っているからこそ、私たち信者は、苦しみによって生じる痛みや困難の先を見据え、次の二つのことを思い起こすことができるのです。1) それらの苦しみには、さらに大きな目的があること、そして、2) その苦しみに対して、来世において主が豊かに報いてくださることです。したがって、世の考え方とはまったく正反対ですが、**キリストのために**苦しむことは特権なのです。なぜなら、そのような試練は、私たちの前進を妨げる障害物でも、歩みを遅らせる小さな障害でもなく、むしろ霊的成長を加速させ、これまでに達した霊的成熟の度合いを実証する機会だからです。その結果、私たちはこの世で救い主に栄光を帰し、来世ではそれにふさわしい報いを主から受けることになるのです。

そして、私たちが神の子供であるなら、神の相続人でもあり、キリストと共同の相続人でもある。それは、キリストと共に栄光を受けるために、**私たちが実際にキリストと共に苦しんでいるなら**ばのことである。(ローマ 8 章 17 節)

あなたがたには、キリストのために、キリストを信じることだけでなく、**キリストのために苦しむこと**も恵みとして**与えられている**のである。(ピリピ 1 章 29 節/NIV 訳)

私たちが忍耐するなら(すなわち、苦しみにもかかわらず信仰を保ち続けるなら)、キリストと共に支配することにもなる。(第二テモテ 2 章 12 節前半)

(6) この究極の救いを待ち望み、あなたがたの**喜び**はあふれている。今しばらくの間、さまざまな試練によって**苦しまなければ**ならないことがあっても、(7) それは、あなたがたの信仰が本物であることが明らかにされるためである。信仰が本物であると証明されることは、金よりもはるかに価値がある。金も火によって精錬されるが、結局は滅びるものだからである。しかし、人生という試練の炉の中で本物であると証明されたあなたがたの信仰は、イエス・キリストが栄光のうちに再臨されるとき、あなたがたに**称賛と栄光と誉れをもたらす**ことになる。(第一ペテロ 1 章 6-7 節)

しかし、あなたがたが[真に]キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、**喜びなさい。**それは、キリストが栄光のうちに現れられるときにも、**あなたがたが**大いに**喜び、歓喜するため**である。(第一ペテロ 4 章 13 節)

最後に引用した聖句、すなわち、今学んでいる第一ペテロ 4 章 13 節を注意深く考えると、その意味は、これまで一貫して述べてきたこととまさに同じです。つまり、キリストのために、またキリストについて証しする者として、キリストのために苦しみにあずかることは特権であり、私たちはそれを喜ぶべきだということです。それは、誰かが苦しむこと自体を楽しんでいるからではなく、その苦しみが、今この世における私たちの霊的前進を示しているからであり、また、私たちの永遠の将来に対して約束しているものがあるからです。私たちの主が「栄光のうちに現れられる」のは、主の再臨のときです。そして、そのすぐ後にキリストの裁きの座での裁きが行われます(マタイ 16 章 27 節; 黙示録 22 章 12 節)。終末の時系列における私たちの現在の位置を考えると、その栄光に満ちた出来事が起こるまで、もうほとんど時間は残されていません。主が私たちに望んでおられることを行い、自分を否定し、自分の十字架を負って主に従い、霊的成長、前進、そして実を結ぶことを追い求めようと決意した信者は、試練に遭ってもくじけず、イエス・キリストのために苦しみに耐えるよう求められたときにも、あきらめたり、不平を言ったりしないと、あらかじめ心に決めておく必要があります。むしろ、どのような試練であっても、主が私たちを信頼してその試練を委ねてくださっていることを積極的に思い起こし、主の栄光と、私たち自身の永遠の喜びと報いのために、その試練に合格しようと決意すべきなのです。

(20 節後半)「貧しい者たちよ、幸いである。神の御国はあなたがたのものだからである。(21) 今、飢えている者たちよ、幸いである。あなたがたは満ち足りるようになるからである。今、泣いている者たちよ、幸いである。あなたがたは笑うようになるからである。(22) 人々が人の子のゆえに、あなたがたをののしり、仲間外れにし、非難し、あなたがたの評判を傷つけるとき、あなたがたは幸いである。(23) その[将来の]日を[待ち望んで]喜び、躍り上がりなさい。見よ、**天におけるあなたがたの報いは大きい**からである。あなたがたの先祖たちも、預言者たちに同じような仕打ちをしたのである。」(ルカ 6 章 20 節後半-23 節)

私たちの宝は天にあり(マタイ 6 章 21 節; ルカ 12 章 34 節)、すべてがむなしいこの地上にあるのではありません(伝道の書 1 章 2 節)。自分の永遠の命を犠牲にして全世界を手に入れることは、愚かさの極みです(マタイ 16 章 26 節; マルコ 8 章 36 節; ルカ 9 章 25 節)。しかし、イエス・キリストのためにすべてを失うなら、私たちは実

際には、今の私たちには理解しきれないほど大きなものを得ているのです。

(7) しかし、私が[かつての神を敬わない生活において]得ていたものは何であれ、キリストと比べれば、今ではそれらを損失と考えるようになった。(8) それどころか、私の主イエス・キリストを知ることの比類ない価値に比べれば、すべてのものを損失と考えている。私はキリストのためにすべてを失ったが、キリストを得ることに比べれば、[失ったものすべてを]ごみのようなものと考えている。(ピリピ 3 章 7-8 節)

(15) この世も、この世にあるものも愛してはならない。もし誰かがこの世を愛しているなら、その人のうちには御父に対する[真の]愛はない。(16) なぜなら、この世にあるすべてのもの、すなわち肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからである。(17) この世とその欲望は過ぎ去りつつある。しかし、神の御心を行う者は、永遠に[神と共に生き続ける]のである。(第一ヨハネ 2 章 15-17 節)

ですから、状況が最も暗く思えるとき、痛みや困難、挫折を経験しているとき、敵対や災難が降りかかってくるとき、たとえヨブの場合のように、その苦難が私たち自身の悪い行いの結果ではなかったとしても、私たちは自分がどこにいるのかを思い起こす必要があります。それは、悪魔の世界のただ中です。そして、私たちがここで何をしているのかも思い起こす必要があります。それは、私たちの主であり主人である方が、どのような形で私たちを用いようとされても、その御心に従って主に仕えることです。もしそれが、キリストのために深刻な苦しみを受けることを意味するのであれば、私たちには落胆するのではなく、自分自身を神に委ねる権利があり、またそうする義務もあります(第一ペテロ 4 章 19 節)。自分自身を主の御手に委ね、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、あるいは自分の感情が何を訴えていようとも、主が確かに「すべてのことを働かせて、私たちの[永遠の]益としてくださっている」(ローマ 8 章 28 節)と信頼するのです。

栄光の御霊があなたがたの上にとどまっておられる(14 節):

もしあなたがたがキリストの御名のゆえに[実際に]非難されているなら、あなたがたは[真に]幸いである。なぜなら、栄光と力の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまっておられるからである(すなわち、試練の中であなたがたを支えるためである)。(第一ペテロ 4 章 14 節)

キリストのために受ける真の苦しみ、すなわち、ここでは私たちが信者であるという理由だけで不信者から敵意を向けられることとして述べられている苦しみは、祝福なのです。ペテロがこの原則を繰り返しているのは、私たちが耐えている困難を神の観点から肯定的なものと捉え、「すべてを喜びとみなす」べきもう一つの重要な理由を示すためです。それは、私たちが困難に遭う程度に応じて、その試練に耐え、合格するための助けと支えを、聖霊から直接受けることができるということです。

> (3) 私たちの主イエス・キリストの父なる神、憐れみとあらゆる励ましの神が、ほめたたえられますように。(4) 神は、私たちがあらゆる苦難の中にあるときに励ましてくださる方である。それは、私たち自身が神から受けたその励ましによって、あらゆる種類の苦難の中にある人々を、私たちも励ますことができるためである。(5) なぜなら、あなたがたに仕える中で、キリストのために受ける私たちの苦しみが増し加わったのと同じように、キリストを通して私たちが[御霊によって]受ける励ましも、それに応じて増し加わったからである。(第二コリント 1 章 3-5 節)

ここで御霊は「栄光の御霊」と呼ばれています。これは、私たちが復活して栄光を受けるときに与えられる報いに、私たちの注意を向けさせる表現です(ローマ 8 章 30 節; ローマ 8 章 11 節, 17 節; 第二コリント 4 章 14 節参照)。このことについては、すでに上で論じました。しかし、ここでは御霊は「力の御霊」とも呼ばれています。そして、私たちの内に住んでおられる聖霊が、**神ご自身である**ことを覚えておくのは大切なことです。神に不可能なことは何もありません。ですから、キリストのために耐えている苦しみを乗り越えるために、私たちが本当に必要としているものは何であれ、御霊はすべてご存じであり、それを与える力も完全に備えておられるのです。

> 同じように、御霊も私たちの弱さを助けてくださる。私たちは何を祈るべきか分からないが、御霊ご自身が、言葉では言い表せないほど切なる願いをもって、私たちのためにとりなしてくださるのである。(ローマ 8 章 26 節)

御霊は私たちの内に住んでおられ、私たちの味方であり、私たちが本当に必要としているものをすべてご存じです(私たち自身には、それが実際には分かっていません)。そして、ここでは御霊が特別な働きによって「私たちの上にとどまっておられる」と述べられています。それは、私たちが試練に耐え抜き、忍耐し続けるために必要なものを、何一つ欠けることなく与えてくださるためです。特に、主イエスが私たちに臨むことを許されるどのような試練においても、あきらめることなく、むしろ耐え抜くために必要な励ましを与えてくださるのです。パウロが証ししているように(第二コリント 1 章 3-5

節)、困難が増し加われば、それに応じて、私たちの内に住んでおられる御霊、すなわち神ご自身からの励ましも、単に苦難に見合うだけでなく、それをはるかに上回るほど豊かに増し加わると、私たちは確信することができます。

「その日、その時」が近づいていることを考えると、これは今ここで十分に理解し、心に刻んでおくべき重要な原則です。今日、私たちがイエス・キリストのために非難を受けることがあるなら、艱難期にはそれが極めて激しいものになることは確かです。その最も困難な時期を乗り越えるためには、御霊の助けが不可欠となります。上に引用した聖句は、私たちにその助けが与えられていることを保証しています。しかし、具体的には、どうすればその助けを十分に受けることができるのでしょうか。

(5) 肉に心を向けている者たちは肉のことを考え、御霊に心を向けている者たちは御霊のことを考える。(6) 肉に従う思いは死をもたらすが、御霊に従う思いは命と平安をもたらす。(7) なぜなら、肉に従う思いは神に敵対するものだからである。それは神の律法に従わず、[従うことさえ]できない。(8)したがって、肉に支配されている者たち(すなわち、罪の性質の奴隷となっている不信者たち)は、神を喜ばせることができない。(9) しかし、あなたがたは肉の支配の下にはなく、御霊の支配の下にある。それは、神の御霊が本当にあなたがたの内に住んでおられるならばのことである。もし誰かがキリストの御霊を持っていないなら、その人はキリストに属する者ではない。(ローマ 8 章 5-9 節)

神の御霊に導かれている者は皆、神の[真の]子供たちである。(ローマ 8 章 14 節)

(16) しかし、私は言う。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲することを行うことはない。(17) なぜなら、肉の欲することは御霊の御心に反し、御霊は肉の欲することに反対されるからである。このように両者は互いに真っ向から対立しているので、あなたがたは自分の望むことをそのまま行うことができないのである。(18) しかし、御霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいない。(19) 罪の性質の働きは明らかである。すなわち、不品行、汚れ、好色、(20) 偶像礼拝、魔術、憎しみ、争い、ねたみ、激しい怒り、利己的な野心、不和、分派、そねみ、(21) 酩酊、乱痴気騒ぎ、そしてこれらに類するすべてのことである。以前にも警告したように、今もあなたがたに警告する。このような生活をする者たちは、天の御国を受け継ぐことはない。(22) しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、忍耐、親切、正しさ、信仰、(23) 柔和、自制である。このようなものを禁じる律法はない。(24) キリスト・イエスに属する者たちは、肉をその弱さや欲望と共

に十字架につけたのである。(25) 私たちが御霊によって生きているなら、御霊によって歩もうではないか。(ガラテヤ 5 章 16-25 節)

これらの聖句が示しているように、聖霊の働きから益を受けることができるかどうかは、御霊の導きに従うかどうかにかかっています。したがって、御霊の助けを自分のものとすることは、受け身のことではありません(私たちが何もしなくてよいということではなく、御霊に従わなければなりません)。また、それは自分自身の力によって生み出すものでもありません(つまり、私たちが御霊を支配するのではなく、御霊の導きに従うことによって、正しい歩みをしているときに、その助けを受けるのです)。

したがって、聖霊の助けと励ましを最大限に受けるための鍵は、御霊の働きかけに私たちがどう応答するかにあります。御霊は、私たちの良心と、私たちが信じてきた真理の記憶を通して、私たちに働きかけてくださいます。私たちが霊的に成熟し、神の真理をより多く学び、それを信じて自分のものとしていくほど、御霊の「静かな細い声」(列王記上 19 章 12 節)を、よりよく聞き取ることができるようになります。しかし、その声にどう応答するかは、依然として私たちの自由意志の問題です。信仰をもって応答することもできれば、応答しないこともできるのです。御霊が思い起こさせてくださることに私たちが応答するとき、御霊は私たちを励まし、力づけ、導いてくださいます。一方、御霊の導きではなく、自分の感情や利己的な優先事項、この世の否定的な声、あるいは悪魔の影響に注意を向けるなら、私たちは、「志を立てさせ、事を行わせる」ために私たちの内におられる方(ピリピ 2 章 13 節)から益を受ける機会を逃してしまいます。しかし、御霊が与えてくださるものを十分に活用できなかったとしても、そのことで落胆する必要はありません。なぜなら、私たちが御霊とその働きかけに応答しようとするときにはいつでも、聖霊に満たされ、聖霊によって満ち足りた歩みをする機会が、豊かに与えられているからです(エペソ 5 章 18 節)。

ダビデは非常に苦しんでいた。民が彼を石で打ち殺そうと言っていたからである。民は皆、自分の息子や娘のことで心を痛めていた。しかし、ダビデは自分の神である主にあって、自らを励ました。(サムエル記上 30 章 6 節 /KJV 訳)

この聖句は、その過程がどのように働くかを示す良い例です。ダビデは「非常に苦しんでいた」とありますが、ヘブル語では文字どおりには「圧迫を感じていた」という意味です。しかし、ダビデは絶望に屈するのではなく、行動を起こし、「主にあって自らを励ました」のです。もちろん、ダビデは聖霊の助けなしにこれを行うことはできませんでした。私たちが行うすべての良いことは、御霊によってなされるからです(例えば、第一コリント 12 章 3 節)。第二に、ダビデが成熟した信者でなければ、これを行うことはできな

かったでしょう。つまり、彼の心には、信じて受け入れ、保ち続けてきた十分な真理という霊的な蓄えがあり、さらに、それまで何度もその真理を実生活に適用することによって、その真理が心にしっかりと定着していたのです。その結果、彼の信仰は大いに強められており、今回のように状況が絶望的に見えるときでさえ、神の約束を信じることができたのです。最後に、救いと成功をもたらしてくださったのは主であり、ダビデに真理を思い起こさせ、あきらめずに自らを励ますよう導いてくださったのは御霊でしたが、ダビデ自身も実際に行動を起こさなければなりませんでした。彼は、神が自分に与えてくださった約束を思い起こし、それを信じることを選ぶことによって、「自分の神である主にあって」自らを励まさなければならなかったのです。

クリスチャン生活においては、いつもこのように働くのです。神が導き、神が力を与えてくださいます。しかし、どのような危機や試練に直面していても、私たちは以前に学んだ真理に応答し、今まさに御霊が私たちに適用するよう促しておられるその真理を、実際に用いる必要があります。したがって、御霊による力づけ、御霊の導き、御霊の励ましは、私たちが何もしなくても「自動的に成功する」ものではありません。御霊は神であり、御霊の前に立ちはだかることのできるものは何もありません。しかし、私たちには、御霊の穏やかな導きに耳を傾け、これまで訓練されてきたとおりに、善良で敬虔な態度をもって応答し、御霊が働かれるようにすることが求められています。だからこそ、聖書は繰り返し、私たちに行動するよう命じているのであり、神が私たちの自由意志を無視して働かれるなどとは、決して示唆していないのです。

強く、雄々しくありなさい。彼らを恐れてはならない。おびえてはならない。あなたの神である主が、あなたと共に行かれるからである。主は決してあなたを離れず、あなたを見捨てることもない。（申命記 31 章 6 節 /NIV 訳）

警戒しなさい。信仰に堅く立ちなさい。雄々しくありなさい。強くありなさい。（第一コリント 16 章 13 節 /NIV 訳）

(1) それゆえ、あなたがたはキリストと共に[立場上]復活したのだから、上にあるものを求め続けなさい。そこにはキリストがおられ、神の右に座しておられる。(2) 地上のものではなく、上にあるものに心を向け続けなさい。（コロサイ 3 章 1-2 節）

最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて称賛に値すること、何か優れたことがあり、ほめたたえるに値することがあるなら、そのようなことに心を向け

なさい。(ピリピ 4 章 8 節 /NIV 訳)

上に挙げた命令のいずれも、また、これらに類するほかのどのような命令も、聖霊に応答し、私たちが信じてきた真理を必要に応じて実際に適用することなしには、守ることができません。実際、聖書の中で信者に与えられている数多くの命令や勧めはすべて、御霊に耳を傾け、真理に積極的に応答するという、まさにこの同じ過程を通してのみ従うことができると言っても、決して言い過ぎではありません。十字架以前にも、これは可能でした。しかし、聖霊が実際に私たちの内に住んでおられる今日の信者は、聖霊が絶えず与えてくださる導き、励まし、力づけを受け入れないとき、その責任を自分以外の誰かに負わせることはできません。

(16) わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父はもうひとりの励まし主をあなたがたに与え、その方が永遠にあなたがたと共におられるようにしてくださる。(17) その方は真理の御霊であり、世はこの御霊を受けることができない。世は御霊を見ることも、知ることもないからである。しかし、あなたがたは御霊を知っている。御霊はあなたがたと共に住んでおられ、あなたがたの内におられるようになるからである。(ヨハネ 14 章 16-17 節)

しかし、励まし主、すなわち父がわたしの名によって遣わされる聖霊は、あなたがたにすべての[真理]を教え、わたしがあなたがたに語ったすべての[真理]を思い起こさせてくださる。(ヨハネ 14 章 26 節)

しかし、あなたがたについて言えば、あなたがたが主から受けた油注ぎは、あなたがたの内にとどまっている。そして、あなたがたには、誰かに[このこと(すなわち、26 節およびそれ以前に述べられたこと)を]教えてもらう必要はない。主の油注ぎが、すべてのことについてあなたがたに教えており、その教えは真実であって偽りではないのだから、その油注ぎがあなたがたに教えたとおり、主の内にとどまりなさい。(第一ヨハネ 2 章 27 節)

最後に、私たちが並外れた困難に直面しているときには、それを乗り越えられるように、御霊の助けもまた豊かに与えられると知ることは、大きな励ましとなります。

なぜなら、あなたがたに仕える中で、キリストのために受ける私たちの苦しみが増し加わったのと同じように、キリストを通して私たちが受ける励ましも、それに応じて増し加わったからである。(第二コリント 1 章 5 節)

もしあなたがたがキリストの御名のゆえに[実際に]非難されているなら、あなたがたは[真に]幸いである。なぜなら、栄光と力の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまっておられるからである。(第一ペテロ 4 章 14 節)

したがって、困難が訪れたときには、どのような試練に直面していても、私たちはなすべきことを行うのです。その際、私たちがそれを行うための力を与えてくださっているのは聖霊であり、私たちが御霊にそうしていただくことを妨げさえしなければ、御霊が必ずその試練を乗り越えさせてくださると、全き信仰と確信をもって行動するのです。

殺人者、盗人、悪を行う者、他人のことに干渉する者としてではなく(15-16 節):

(15) あなたがたのうち、誰も殺人者、盗人、悪を行う者、あるいは他人のことに干渉する者として苦しむことがあってはならない。(16) しかし、もし[誰かが]「クレスティアン」と[呼ばれて苦しむ]のであれば、それを恥じてはならない。むしろ、その名のゆえに神に栄光を帰しなさい。(第一ペテロ 4 章 15-16 節)

15 節に挙げられている最初の三つの非難の呼び名、すなわち殺人者、盗人、悪を行う者は、いずれも重大な犯罪を表しています。殺人と盗みについては、特に説明する必要はないでしょう。ただし、この二つはそれぞれ十戒の第六戒と第八戒に違反するものであり、命の尊厳と財産の不可侵性を侵すものです。これらはいずれも、人々がこの世で生存し、誰もが神を求めることができるために必要な要素です(使徒行伝 17 章 26-27 節参照)。「悪を行う者」と訳されているギリシヤ語は kakopoios(カコポイオス)であり、この一般的な訳語は、その語源を文字どおりに反映したものです(カコス kakos は「悪い」、ポイエオーpoieo は「行う/作る」を意味します)。しかし、実際のギリシヤ語の用法では、この言葉は、大小を問わず、広範囲にわたる有害な犯罪行為を指しています。したがって、ここで殺人と盗みの直後にこの言葉が置かれていることによって、クリスチャンが避けるべき不名誉な行為の範囲は、「あらゆる種類の軽犯罪と重犯罪」にまで広げられているのです。同様に、「他人のことに干渉する」とは、おせっかいを焼いたり、他人のことを詮索したり、求められてもいないのに他人の問題に首を突っ込んだりすることを意味します。この言葉もまた、広い範囲の行為を含むものとして用いられており、ほかの三つの行為のように法律に違反するものではないとしても、人にも神にもつまずきを与えたくないと願うクリスチャンが、同じように避けるべき、その他すべての不名誉な行為を含んでいるのです。

殺人や強盗、その他の犯罪のために苦しむこと、また、非難を招くようなひどい振る舞いのために苦しむことは、公正であるばかりでなく、司法や人間関係の通常の成り

行きとして当然予想されることです。ペテロがここで想定している人物は、まったく自分自身の悪い行いによって悪評を招いたのであり、したがって、「殺人者」「盗人」「悪を行う者」「他人のことに干渉する者」と呼ばれるのも当然なのです。イエス・キリストに従う者が、正当な理由によってそのような呼び名を付けられることなど、決してあってはなりません。しかし、実際に何か悪いことをしたためではなく、まさに私たちがイエス・キリストに従う者であるという理由で悪く言われるとしたら、どうでしょうか。それは少しも恥じるべきことではありません。むしろ、これまで見てきたように、そのような形でキリストのために苦しむことは名誉なことであり、永遠の報いをもたらすのです。

しかし、ペテロがここで念頭に置いている不信者たちは、「クリスチャン」とは何かをまったく知りませんでした。なぜなら、ペテロがこの書簡を書いた当時、その言葉はまだ造られてさえいなかった可能性が高いからです（たとえすでに存在していたとしても、広く使われていたわけではなく、キリストに従う者たちを表す最も適切な呼び名として、教会全体に一般的に受け入れられていたわけでもありません）。[9] ここで、最も優れたギリシヤ語写本の一つであるシナイ写本に見られるのは、「クリスティアン」（Christian）ではなく、「クレスティアン」（Chrestian）という言葉です。つまり、長い「イ」ではなく、長い「エ」の音を持つ綴りになっているのです。この違いは重要です。「クレスティアン」は、信者たちが自分たちを表すために作り出した言葉ではありません。この呼び名は、不信者たちが、自分たちにとって新しく奇妙に思えたこの集団の信奉者たちを、否定的に特徴づけるために作り出したものです。ペテロがすでに述べているように、異教徒たちが好んでいたあらゆる種類の不法な行いに信者たちが加わろうとしないことを、彼らは「不思議に思い」、そのように距離を置く「堅苦しい潔癖さ」に反感を抱いていました（第一ペテロ 4 章 4 節）。そのため、彼らはクリスチャンをあざける呼び名として、「善人ぶった者たち」と呼んだのです。これが「クレスティアン」の基本的な意味です（「良い」を意味するギリシヤ語 クレストス chestos に由来します）。

---

[9] これは、新約聖書にこの言葉が登場する三つの箇所（使徒行伝 11 章 26 節, 26 章 28 節; そして今回取り上げている箇所<第一ペテロ 4 章 15-16 節>）のすべてにおける、元来の綴りです。後代の写字生たちは、目に見える教会で用いられるようになった慣習に合わせて、その綴りを変更しました。「クリスチャン」という呼び名が広く採用されるようになったのは、紀元 3 世紀あるいは 4 世紀になってからのことかもしれません。F・ブラスは、学術誌 Hermes 第 30 巻第 3 号（1895 年）、465-470 ページに掲載された論文「Chrestianoi / Christianoi」の中で、古い時代のキリスト教徒の墓碑の多くには、より初期の（正しい）形だけが見られることを実証しています。これは、初期の信者たちがペテロの勧めを受け入れていたこと、また、彼らがまだ「クリスチャン」という呼び名を知らなかったことを示しています。また、BDF 文法書の 5.2、脚注 3 も参照してください。そこでは、「クリスチャン」という言葉がラテン語式の形容詞形成によるものであることが示されており、したがって、「クリスチャン」は「クレスティアン」が変化したものであることが示唆されています（スエトニウスがキリストを指すのに「クレストゥス」という言葉を用いていることも参照。Div. Claud. 25）。Ichthys の「『クリスチャン』という名称」も参照してください。

そのような呼び名を付けられた人は、信者たちの距離を置く態度を見下していた異教徒たちから、親しい相談相手や仲間として受け入れられることを期待できませんでした。したがって、仲間外れにされること、そしてそれに伴うさまざまな不利益に耐えることは、敬虔に歩むことによって生じる、キリストのための苦しみの一部だったのです。今日でも、現代社会の多くの「文化的な活動や慣習」から距離を置くことによって、クリスチャンが「自分だけ聖人ぶっている」と決めつけられ、その結果、避けられたり（しばしば不利益を受けたり）することがあると言えるでしょう。今日、私たちは「クリスチャン」という名のもとで、この種の非難を受けることがあります。しかし、キリストに従う者と呼ばれることを、信者は決して恥じるべきではありません。特に、聖別された敬虔な歩みをしているためにそう呼ばれるのであれば、なおさらです。ペテロの時代にも、その過程と結果はほとんど同じでしたが、使われていた呼び名が異なっていました。それは、物事の善悪を逆さまにして考える異教徒の不信者たちにとって、「殺人者」「盗人」「悪を行う者」「他人のことに干渉する者」と同じくらい忌まわしいものと見なされていた呼び名でした。しかし、御霊に導かれて書いているペテロは、そのような呼び名をむしろ受け入れるようにと、読者たちに告げているのです。私たちが正しいことを行い、悪いことを拒んだために、キリストのゆえに非難を受けるなら、どれほどあざけりの言葉や仲間外れにされることが心に痛みを与えようとも、それを決して恥じるべきではありません。私たちがこの世にいるのは、私たちの主イエスを喜ばせるためであって、主を知らないこの世を喜ばせるためではないのです。

裁きが始まる時（17 節）：

> 裁きが始まる時が来ている。それは神の家から始まる。そして、それがまず私たちから始まるのであれば、神の福音を信じない者たちの最後はどうなるであろうか。（第一ペテロ 4 章 17 節）

ペテロは、私たちを励ますために、上の言葉を述べています。私たち信者は、イエス・キリストのために、不信者たちの手によって不当な苦しみを受けているかもしれません。しかし、裁きは必ずやって来ます。このことを思い起こすことは、三つの理由から私たちにとって励ましとなるはずです。第一に、私たちがこの地上で過ごす時間は短く、急速に近づいている艱難期を考えるなら、一部の人々が思っているよりもさらに短いことを覚えておくことは、私たちの目を、やがて来る栄光へと向けさせてくれます（第一コリント 10 章 11 節参照）。教会に対する裁きは、私たちが復活し、二度と病気にならず、年を取ることも、痛みを経験することもない、美しく素晴らしい新しい体を与えられるまでは行われません。今は肉体的にも精神的にも苦しんでいるかもしれませんが、ど

のような形であれ、私たちが二度と苦しむことのない日が急速に近づいているのです。

(42) 死者の復活も同じである。朽ちるものとして蒔かれる体は、朽ちないものとしてよみがえらされる。(43) 卑しいものとして蒔かれる体は、栄光あるものとしてよみがえらされる。弱いものとして蒔かれる体は、力あるものとしてよみがえらされる。(44) 肉体の命に適した体として蒔かれるものは、霊的な命に適した体としてよみがえらされる。肉体があるならば(そして、それが存在することは明らかである)、霊的な体もあるのである。(45)「最初の人アダムは、命を持つ肉体的な存在となった」と書かれているように、最後のアダムであるキリストは、命を与える霊的な存在となられた。(46) しかし、最初に来るのは霊的な体ではなく、肉体であり、その後に霊的な体が来るのである。(47) 最初の人は地から取られた地に属する者であった。第二の人は天に属する方である。(48) 地に属する人がそうであったように、地に属する私たちもまた同じである。そして、天に属する方がそうであるように、私たちも天に属する姿を取るときには、その方と同じようになるのである。(49) 私たちが地に属する人のかたちを帯びてきたように、天に属する方のかたちをも帯びることになるのである。(第一コリント 15 章 42-49 節)

(13)すると、私に語りかけていた長老の一人が言った。「白い衣を着ているこの人々は誰か。また、どこから来たのか。」(14) 私は彼に言った。「わが主よ、あなたがご存じです。」すると彼は私に言った。「この人々は、大艱難期から出て来ようとしている者たちである。彼らは小羊の血で自分たちの衣を洗い、白くしたのである。(15)それゆえ、彼らは神の御座の前にいて、神の神殿で昼も夜も神に仕えている。そして、御座に座しておられる方は、彼らの上にご自分の幕屋を張られる。(16) 彼らはもはや飢えることも渇くこともなく、太陽が彼らを照りつけることも、どのような焼けつくような[熱]に苦しめられることもない。(17) なぜなら、御座の中央におられる小羊が彼らの羊飼いとなり、命の水の泉(文字どおりには「命の水々の泉」)へと導かれるからである。そして神は、彼らの目からすべての涙をぬぐい取ってくださる。」(黙示録 7 章 13-17 節)

(3)すると、御座から大きな声がして、こう言った。「見よ、神の幕屋が[今や]人々と共にある。神は彼らと共に住まわれ、彼らは神の民となり、神ご自身が彼らの神となられる。(4)神は彼らの目からすべての涙をぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、苦痛の叫びも、悲しみもない。以前のものは過ぎ去ったからである。」(黙示録 21 章 3-4 節)

すでに述べたように、クリスチャンの報いと、私たち全員がキリストの ベーマ(裁きの座)の前で受ける裁きについては、別の箇所で詳しく論じています。[10] ここでは、裁きが間近に迫っているというペテロの言葉が、私たちにとって励ましとなる第二の理由を述べるだけで十分でしょう。それは、この世でイエス・キリストのために行ったすべてのことに対して、私たちが報いを受けるということです。たとえ主の御名によって差し出した一杯の冷たい水のように、一見取るに足りないことであっても同じです(マタイ 10 章 42 節)。復活のときに私たちを待っている素晴らしい宝を思い起こすことは、これまで見てきたように、苦しみに耐えるために欠かせない手段の一つです。私たちは父祖アブラハムと共に、この世の命の先を見据え、「その設計者であり建設者が神である」永遠の都(ヘブル 11 章 10 節)、すなわち天にある新しいエルサレムを待ち望んでいるのです。そこにこそ、私たちの真の国籍と永遠の住まいがあります。それは、私たちが主と共に、また互いに共に、永遠に過ごすことができるように、イエスが備えてくださった場所です(ヨハネ 14 章 2-3 節)。そこには真珠の門、宝石で造られた土台、透き通った金で造られた大通りや建物、十二の実りを結ぶ命の木、そして水晶のように澄んだ命の川の水があります。そして、そこには御父と小羊がおられ、私たちは永遠にその方々と共に過ごし、その栄光を顔と顔を合わせて見ることになるのです。

差し迫った裁きについてのこの言葉が励ましとなる第三の理由は、私たちを迫害する者たちに、まもなくその行いにふさわしい報いが下されるからです。確かに、私たち自身も、「この体を通して行ったこと」(第二コリント 5 章 10 節)について裁きを受けるためにイエス・キリストの御前に立つことを思うとき、神を畏れる者としての正当な恐れを感じます。正しく考えているなら、使徒パウロのような偉大な信者でさえそうであったように、これは私たち全員に当てはまるはずです(第二コリント 5 章 11 節)。しかし、イエス・キリストを信じる私たちは、主が私たちの人生を評価される際に、たとえ多少のつらい瞬間を経験することがあったとしても、主の教会、主の花嫁の一員としての立場は確かなものであると知っています。主は私たちの罪のために死なれ、私たちは主の血、すなわち私たちのための十字架上の死によって贖われたのです(黙示録 7 章 14 節; 22 章 14 節)。私たちが感じる苦痛はほんの一瞬であり、やがて新しいエルサレムで主と共に、また互いに共に永遠に過ごす中で経験する、言葉に尽くせない喜びに、たちまちのみ込まれてしまうでしょう。そのとき私たちは、聖霊によって成し遂げたすべての霊的成長、前進、そして実を結ぶ働きに対して、十分な報いを受けるのです。しかし、不信者たち、すなわち私たちを迫害し、避け、私たちの名を悪いものとして言いふらしたすべての人々にとって、永遠に受ける分は火の池なのです(黙示録 20 章 11-15

---

[10] 特に、「来たる艱難期 第 6 部」I.7.「教会の裁きと報い」<リンク先ファイル/あるいは A4版印刷本の 42 頁-を参照下さい>を参照してください。

節)。

(41)「人の子は御使いたちを遣わし、彼らはその御国から、つまずきとなるすべてのものと、不法を行う者たちを集め出し、(42) 火の燃える炉に投げ込む。そこでは、人々が泣き叫び、歯ぎしりするであろう。(43) そのとき、義人たちは彼らの父の御国で、太陽のように輝くであろう。聞く耳のある者は聞きなさい。」(マタイ 13 章 41-43 節 /NKJV 訳)

義人でさえかろうじて救われる(18 節):

なぜなら、[こう書かれているとおり]、「義人でさえかろうじて救われるのであれば、不敬虔な者や罪人はどこに身を寄せることができようか」(箴言 11 章 31 節)。(第一ペテロ 4 章 18 節)

イエス・キリストを信じる者として、私たちは自分たちが救われていることを知っています(例えば、ヨハネ 3 章 18 節; 使徒行伝 16 章 31 節; エペソ 2 章 8-9 節)。しかし、福音において約束されているすべての栄光にあずかるためには、まず信仰を保ったままゴールに到達し、「初めに抱いた確信を最後まで堅く保たなければならない」(ヘブル 3 章 14 節; 第一コリント 15 章 2 節; コロサイ 1 章 21-23 節; 第二テサロニケ 2 章 11-13 節; ヘブル 3 章 6 節参照)ということも事実です。聖書教師は、自分が教える人々に、真理に基づく正しい確信を与える必要があります(ペテロは最も優れた聖書教師の一人であっただけでなく、ここでの彼の言葉は、もちろん御霊によって霊感されたものです)。私たちはすでに救われており、今も救われつつあり、そして将来も救われるのです。これが私たちの救いの確かさであり、信仰による勝利を得る限り、決して覆されることはありません(第一ヨハネ 5 章 4-5 節; 黙示録 2 章 7 節, 11 節, 17 節, 26 節; 3 章 5 節, 12 節, 21 節; 21 章 7 節)。しかし、聖書教師は、救いのように二つの側面を持つ事柄について、その「もう一方の側面」を聞く人々に警告することも怠ってはなりません。すなわち、私たちの救いは、**信仰を堅く保ち続ける限りにおいて**、絶対に確かなものなのです。信者は救われています。不信者は救われていません。たとえかつて信じていたとしても、今は信じていないのであれば、救われていないのです。背教は現実に起こることです。そして、それが艱難期の大背教ほど明白になり、また大規模に起こることは、ほかにありません。そのとき生きている信者の実に三分の一が、信仰から離れ去ると預言されているのです。

御子を信じる者は裁かれない。しかし、信じない者は、神のひとり子の御名(すなわち、その御方ご自身)を信じなかったという理由で、すでに裁かれている

のである。(ヨハネ 3 章 18 節)

それゆえ、私の兄弟たちよ、あなたがたはいつも[真理に]従順であったのだから、私があなたがたと共にいたときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののきながら、自分自身の救いを全うするために励みなさい。(ピリピ 2 章 12 節)

私たちの救いは、決して今にも失われそうな不安定なものでは**ありません**。イエス・キリストは私たちを愛し、私たちのために死んでくださいました。私たちの罪はすべて赦されており、私たちの主であり主人である方は、私たちが永遠にご自分の体、花嫁、教会の一員であり続けることを心から望んでおられます。私たちのなすべきことは、その救いをしっかりと保ち、最後まで忍耐し、この世の圧迫や試練、苦難によって信仰が押し流されることのないようにすることです。

(11) 次の言葉は信頼できる。私たちがキリストと共に死んだのであれば、キリストと共に生きることにもなる。(12) 私たちが忍耐するなら、キリストと共に支配することにもなる。私たちがキリストを否むなら、キリストも私たちを否まれる。(13) 私たちが不信実であっても、キリストは真実であり続けられる。なぜなら、キリストはご自身を否むことができないからである。(第二テモテ 2 章 11-13 節)

信仰を保って忍耐し続けることが、艱難期ほど困難になることはありません。そのとき私たちは、獣の刻印を受けるよりも、主のために命を捨てるよう求められるかもしれないからです。救いという賞を見据え、それに伴う復活のすべての栄光を心に留めておくことは、信者がその最も困難な時期を信仰を失わずに乗り越えるために、絶対に必要なこととなるでしょう。

(10) そのとき、多くの者が信仰から離れ、互いに裏切り、憎み合うようになる。(11) また、多くの偽預言者が現れ、多くの人々を惑わすであろう。(12) そして、[そのとき]不法が増し加わるため、多くの人々の愛は冷たくなる。(13) しかし、最後まで耐え忍ぶ者、その者こそが救われるのである。(マタイ 24 章 10-13 節)

まもなく訪れるあの恐ろしい時代の厳しい試練について考えると、圧倒されそうに感じるかもしれません。そして、私たちも弟子たちと同じように、「主よ、それでは誰が救われることができるのでしょうか」(マタイ 19 章 25 節)と尋ねたくなるかもしれません。です

から、主が彼らにお答えになった言葉を、私たちは決して忘れてはなりません。

「人にはこれは不可能である。しかし、神にはすべてのことが可能である。」（マタイ 19 章 26 節後半 /NKJV 訳）

苦しみを受けている人々（19 節）：

それゆえ、神の御心に従って苦しみを受けている者たちは、善を行いながら、自分の命を真実な創造主に委ねなさい。（第一ペテロ 4 章 19 節）

苦しみは、特にそれが予期せぬものであり、不当で、耐え難いものである場合、人々が背教に陥る主な原因の一つとなります。つまり、その苦しみが「神の御心」であることを理解し、神に信頼し、善を行い続け、神の完全な真実さを確信する代わりに、怒りを抱いたり、不機嫌になったり、絶望に陥ったりすることを自ら許してしまい、その結果、ついには信仰から離れ去ってしまうのです。

岩地に蒔かれた者とは、御言葉を聞くと、すぐに喜んで受け入れる者のことである。しかし、その人の[信仰には]根がないので、しばらくの間しか続かない。そのため、御言葉のゆえに苦難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう（スカンダリゼタイ skandalizetai、すなわち背教する）のである。（マタイ 13 章 20-21 節）

同様に、岩地に蒔かれた[第二の種類の]者たちとは、御言葉を聞くと、すぐに喜んで受け入れる者たちである。しかし、彼ら自身の内には[信仰の]根がなく、ただ一時的な[信者]にすぎない。御言葉のゆえに苦難や迫害が[彼らに]臨むと、すぐにつまずいてしまう（スカンダリゾンタイ skandalizontai、すなわち背教する）のである。（マルコ 4 章 16-17 節）

岩の上に[信仰の種が落ちた]者たちは、御言葉を聞くと、喜んで受け入れる。しかし、このような者たちには[信仰の]根がない。彼らはしばらくの間は信じるが、**試練の時には**背教してしまうのである。（ルカ 8 章 13 節）

今回の聖句で、ペテロはキリストのための苦しみに耐える秘訣を教えています。信者は、どのような苦しみを受けなければならないとしても、たとえそれが艱難期の恐ろしい苦難であっても、「それは私たちに対する神の御心である」ということを覚えておかなければなりません（第一テサロニケ 5 章 18 節）。なぜなら、私たちの人生に起こること

は、**何であれ**「神の御心」だからです。神のご計画は完全に包括的であり、すべてを含んでいます。神は、これまでに起こったこと、今起こっていること、そしてこれから起こるすべてのことを、一つ残らず考慮に入れておられます。実際、神がそれを許されなければ、何一つ起こることはあり得ません。人間の目には、物事が偶然や気まぐれな成り行きによって起こっているように見えるかもしれません。しかし、私たち信者は、すべてのことが、慈しみに満ちた神のまなざしと力強い御手のもとにあることを知り、理解しています。神のかたちに造られたすべての人間が下す、大小を問わない一つ一つの決断をすべて考慮に入れたうえで、永遠の過去において、あらゆることが細部に至るまで定められているのです（ローマ 8 章 28-30 節）。私たちはこの人生で試されることがあるかもしれません。いや、必ず試されるのです。この人生そのものが試練**なのです**。それは、私たちが主と共にいることを望んでいるかどうか、また、死と滅びから私たちを救い出してくださった主に対して、どれほど深い愛を抱いているか（あるいは、抱いていないか）を試すものです。この試練に合格するためには信仰が必要であり、信仰とは信頼することです。私たちは初めてイエス・キリストを信じたとき、死から救い出してくださるよう主に信頼しました。そして、その後も、霊的な成長、前進、実を結ぶ働きという歩みの一歩一歩において、主を信頼し、主が私たちに与えてくださった真理の言葉を信頼するのです。

> しかし、あなたがたがこれまでに達したところに従って、同じように前進し続けなさい。（ピリピ 3 章 16 節）

> (6) それゆえ、あなたがたが[初めに]キリスト・イエスを[自分たちの]主として受け入れたのとまったく同じように、[その同じ信仰によって]キリストにあって歩み続けなさい。(7) キリストの内に根を下ろし、キリストにあって建て上げられ、教えられたとおりに信仰を堅くし、感謝にあふれなさい。（コロサイ 2 章 6-7 節）

信仰が救いの鍵であり、また、その同じ信仰が私たちの霊的前進の鍵でもあるのですから、信仰がキリストのための苦しみに耐える秘訣でもあることは、驚くには当たりません。私たちは、どのような苦しみを受けるとしても、それが神の御心であることを、**信仰によって**理解します。また、私たちが直面しているこれらの困難は、この世の人々にはそう見えなくても、実際には、神がすべてのことを働かせて、私たちのために真の、神から来る善を実現してくださっていることを、**信仰によって**理解するのです（ローマ 8 章 28 節）。神はそれによって私たちの信仰を強め（ヤコブ 1 章 3 節）、さらにこれから訪れる試練に備えさせてくださいます。それは、私たちの主に栄光が帰され、私たち自身も永遠の大きな報いを受けるためです（第一ペテロ 1 章 7 節）。神はご自身の栄

光のために私たちを造られました。神は私たちの「創造主」であり、私たちは神のものなのです。そして神は、私たちに対して変わることなく「真実」であられます。イエス・キリストを信頼したことを、私たちは決して後悔しないでしょう。そして、最も困難なときにも主を信頼しようと心に決めるなら、主との交わりが最も深くなる瞬間とは、まさに燃え盛る炉のただ中で、心を尽くして主を信頼するときであることを知るでしょう。

(24) そのとき、ネブカデネザル王は驚き、急いで立ち上がり、顧問たちに言った。「われわれは三人の男を縛って火の中に投げ込んだのではなかったか。」彼らは王に答えて言った。「そのとおりです、王よ。」(25) 王は答えて言った。「見よ、私には四人の男が、縄を解かれ、火の中を歩いているのが見える。彼らは何の害も受けていない。そして、四人目の姿は神の子のようだ。」(ダニエル 3 章 24-25 節 /NKJV 訳)

ダニエルの三人の友人たちは、自分たちの命を主に委ねました。そして主は、奇跡的な方法で彼らを救い出し、世界の歴史において類を見ない特別な経験を彼らに与えてくださいました。彼らは、自分たちの神が真実な方であり、自分たちを救い出す力を完全に持っておられることを**確信して**いました。しかし、彼らが王に告げたように(ダニエル 3 章 16-18 節)、主が彼らを救い出すことをよしとされるにしても、主のために死ぬ苦しみを受けることをよしとされるにしても、彼らは主の御心を行う決意をしていたのです。私たちも同じように、その敬虔な態度を身につけ、どのような不当な苦しみに耐えるよう求められたとしても、その態度を保って忍耐し続ける決意をしようではありませんか。たとえ艱難期の燃え盛る炉に直面することになったとしても、何が起ころうとも、イエス・キリストとその教会のために「善を行うこと」を続けようではありませんか。

もし誰かが[捕囚に定められている]なら、その者は捕囚にされる。もし誰かが[剣による死に定められている]なら、その者は剣によって殺されなければならない。それゆえ、[わたしの]聖徒たちには忍耐と信仰が[求められる]のである。(黙示録 13 章 10 節)

(12) [しかし]聖徒たちは忍耐を持っている。すなわち、このようにして(獣の刻印と獣への礼拝を拒むことによって)神の戒めを守り、イエスへの信仰を[保ち続ける]者たちである。(13) また、私は天から声がして、こう言うのを聞いた。「書き記しなさい。今から後、主にあって死ぬ者たちは幸いである。彼らはその労苦から休むことができる」と御霊は言われる。「彼らの行いは彼らについて行くからである。」(黙示録 14 章 12-13 節)

(12)「見よ」と[主は言われる]。「わたしはすぐに来る。わたしは報いを携えて来て、 それぞれの行いに応じて一人一人に報いる。(13) わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後、初めであり終わりである。(14) 自分の衣を洗う者たちは幸いである。それは、命の木に近づく権利と同じように、門を通る権利も彼らのものとなり、彼らが都に入ることができるためである。」(黙示録 22 章 12-14 節)